

福岡市博多区

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集

1984

福岡市教育委員会

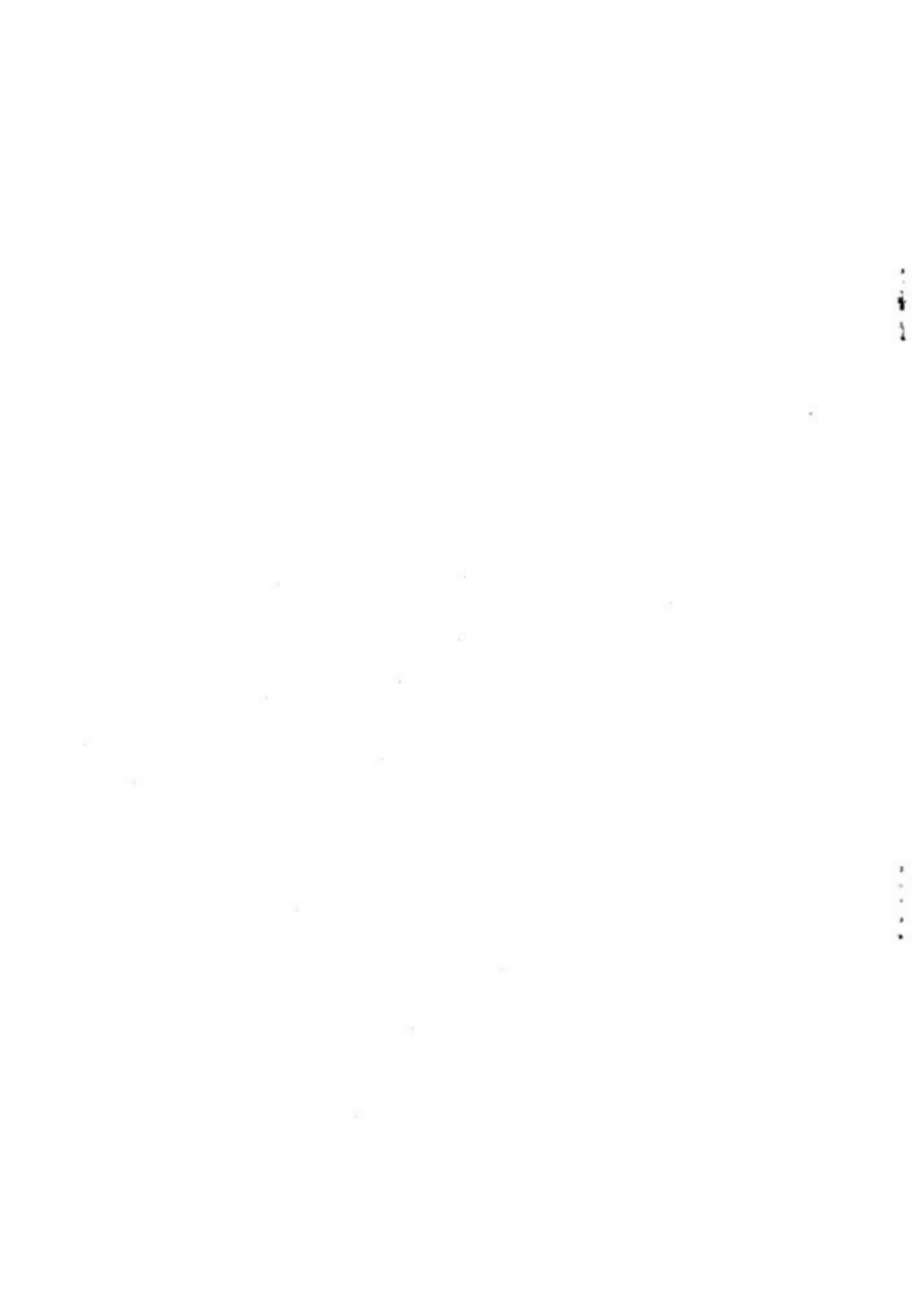
福岡市博多区

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集

1984

福岡市教育委員会



序 文

日本住宅公団（現在は住宅・都市整備公団）は、福岡市博多区駅東3丁目に市街化住宅の開発事業を計画し、福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では、昭和52年9月から建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施し、調査によって杭列遺構が検出されました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるよう広く活用されることを願うとともに、発掘調査から資料整理にいたるまで、日本住宅公団（現在は住宅・都市整備公団）指導員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し、深甚の敬意を表するものであります。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

1. 本書は日本住宅公団（現在は住宅・都市整備公団と名称変更）が計画した博多駅東三丁目の市街地住宅建設事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を日本住宅公団の受託を受けて昭和52年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査は柳田純孝、二宮忠司が担当し、事務は国武勝利が担当した。調査補助員として渡辺和子が参加した。
3. 本書の執筆は柳田と二宮で分担して行なった。
4. 挿図は二宮、渡辺が行なった。
5. 遺構・遺物の写真撮影は二宮が行なった。
6. 描図内のN方位は磁北を示す。
7. 本書の編集は柳田、二宮が行なった。
8. 本書に掲載した地図は建設省国土地理院の承認を得て、同発行の2.5万分の1地形図 N 1-52-10-11-1（福岡11号-1）と福岡南部 N 1-52-10-11-2（福岡11号-2）を複製したものである。

本文目次

I	はじめに.....	1
1. 発掘調査に至るまで.....	1	
2. 発掘調査の組織と構成.....	1	
3. 遺跡の立地と歴史的環境.....	2	
II	発掘調査の概要.....	4
III	調査の記録.....	5
	第1地点.....	5
	1. 土層.....	5
	2. 遺構.....	13
	3. 出土遺物.....	15
	a) 土器.....	15
	b) 石器.....	15
	c) 杣.....	15
	4. 小結.....	23
	第2地点.....	24
	1. 土層.....	24
	2. 遺構.....	28
	3. 出土遺物.....	28
	a) 土器・石器.....	28
	b) 杣.....	28
	4. 小結.....	28
IV	まとめ.....	29

挿図目次

Fig. 1	駅東三丁目周辺の遺跡分布図	(縮尺 1/25,000)	3
Fig. 2	第1地点土層図-1	(縮尺 1/60)	6
Fig. 3	第1地点土層図-2	(縮尺 1/60)	7
Fig. 4	第1地点土層図-3	(縮尺 1/60)	8
Fig. 5	第1・2地点遺構配置図	(縮尺 1/200)	折り込み
Fig. 6	杭列見透し図-1	(縮尺 1/40)	9
Fig. 7	杭列見透し図-2	(縮尺 1/40)	10
Fig. 8	杭列見透し図-3	(縮尺 1/40)	11
Fig. 9	杭列見透し図-4	(縮尺 1/40)	12
Fig. 10	遺物実測図	(縮尺 2/3)	16
Fig. 11	杭実測図-1	(縮尺 1/8)	17
Fig. 12	杭実測図-2	(縮尺 1/8)	18
Fig. 13	杭実測図-3	(縮尺 1/8)	19
Fig. 14	杭実測図-4	(縮尺 1/8)	20
Fig. 15	杭実測図-5	(縮尺 1/8)	21
Fig. 16	杭実測図-6	(縮尺 1/8)	22
Fig. 17	第2地点遺構配置図	(縮尺 1/100)	折り込み
Fig. 18	第2地点土層図・杭列見透し図	(縮尺 1/40)	25
Fig. 19	第2地点杭実測図-1	(縮尺 1/8)	26
Fig. 20	第2地点杭実測図-2	(縮尺 1/8)	27
Fig. 21	土層柱状図		32

図版目次

- | | | |
|--------|------------------|------------------|
| PL. 1 | 1) 杭列全景（西から） | 2) B列杭検出状態（南から） |
| PL. 2 | 1) 西側全景（南から） | 2) 西側全景（南から） |
| PL. 3 | 1) 杭B列とC列全景（南から） | 2) B列全景（北西から） |
| PL. 4 | 1) 杭・B列全景（北東から） | 2) 杭・B列全景（北西から） |
| PL. 5 | 1) 張出し遺構検出状態 | 2) B列張出し部分検出状態 |
| PL. 6 | 1) B列杭の張出し部分 | 2) B列杭検出状態と土層 |
| PL. 7 | 1) 杭列全景 | 2) 杭列とシガラミ検出状態 |
| PL. 8 | 1) 杭列全景 | 2) 杭列全景とシガラミ検出状態 |
| PL. 9 | 1) 杭とシガラミ検出状態 | 2) 青磁出土状態 |
| PL. 10 | 1) 土層状態（北から） | 2) 土層近景 |
| PL. 11 | 1) 第2地点遠景（北から） | 2) 第2地点全景（東から） |
| PL. 12 | 1) 第2地点近景 | 2) 第2地点杭列出土状態 |
| PL. 13 | 1) 第2地点杭列の全景 | 2) 第2地点杭列と出土状態 |
| PL. 14 | 出土遺物、土器・石器 | |
| PL. 15 | 出土遺物、杭 | |
| PL. 16 | 出土遺物、杭 | |
| PL. 17 | 出土遺物、杭 | |

表 目 次

	頁
Tab. 1 福岡市低湿地調査一覧表.....	31
Tab. 2 第1地点杭一覧表—1	35
Tab. 3 第1地点杭一覧表—2	36
Tab. 4 第1地点杭一覧表—3	37
Tab. 5 第1地点杭一覧表—4	38
Tab. 6 第1地点杭一覧表—5	39
Tab. 7 第1地点杭一覧表—6	40
Tab. 8 第2地点杭一覧表—1	41
Tab. 9 第2地点杭一覧表—2	42

付 図 目 次

付図—1 第1地点杭列平面図.....	(縮尺 1/100)
付図—2 第1地点杭列見透し図.....	(縮尺 1/40)
付図—3 駅東周辺の旧地形と遺跡分布図.....	(縮尺 1/10,000)

I はじめに

1. 発掘調査に至るまで

1976年、日本住宅公団(現住宅・都市整備公団)は福岡市博多区駅東3丁目に市街地住宅の建設を計画した。福岡市教育委員会文化課では埋蔵文化財の確認調査の依頼を受け、1976年3月1日事前審査担当の塙屋、力武が試掘調査を行い杭列の存在を確認した。それに基づき文化課と公団で調査時期について協議したが当時は西区(現早良区)四箇田団地の発掘調査を継続していた時期であり、四箇田団地内の発掘調査が終了次第本調査に着手することとなった。

本調査は1977年9月から11月までの3ヶ月間にわたって実施した。その後、各種の発掘調査に追われ、資料整理できないまま今日に至っていたが漸くここに報告書の刊行までこぎつけることができた。調査の開始以来公団関係者をはじめ多くの人々の協力を得たことを記して感謝の意を表します。

開発申請地 福岡市博多区博多駅東3丁目47-1他(現博多区博多駅東3丁目4-10)

開発面積 2,196m²(市街地住宅建設)

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託者 日本住宅公団(現住宅・都市整備公団)九州支社

調査主体 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係

教育長 戸田成一(前)・西津茂美(現)

文化部長 志鶴幸弘(前)・中山 宏(現)

文化課長 清水義彦(前)・生田征生(現)

事務担当 埋蔵文化財係長 三宅安吉(前)・埋蔵文化財第1係長 柳田純孝(現)
岡武勝利(前)・岡島洋一(現)

調査担当 塙屋勝利・力武卓治(試掘調査)・柳田純孝・二宮忠司(本調査)

調査補助員 渡辺和子(現福岡県筑紫野市嘱託)

調査・整備作業員 牛尾準一、大部茂久、尾崎達也、川畠淳一、菅原重美

柳 光雄、屋山利久

池 ヤエ、尾崎八重、菊地栄子、菊地キミ、菅原オリエ

菅原洋子、柳 ツイ、谷ヒサヨ、谷フミエ、又野栄子

松隈ユキノ、土生裕子、山田雪代、尾崎京子、真名子順子
齊藤美紀枝、末安カズ子、若狭睦代、藤内光子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多湾に向かって開けた福岡平野には那珂川、御笠川の二大河川が南から北流し、博多湾に注いでいる。調査地点は、那珂川と御笠川(石堂川)にはさまれた那珂丘陵の北端から北へ0.5kmの沖積地で『福岡市文化財地図』(中部・南部・1千分の1)ではNo.36博多駅の北東隅から西へ23cm、南へ26cmの交点(C-1 駅東生産遺跡)に位置する。

現在の地番は福岡市博多区博多駅東3丁目4番10号にあたるが、福岡市に合併する以前は那珂郡比恵村に所属している。現在の付近の道路面の標高は4mで、昭和初期の現況図では3.7~3.8mの地点にあたるから、現地表高はあまり変化していない。今回の調査地点は丘陵端部と古砂丘の間の沖積低地にあたるが、調査地点の南には、福岡平野の中央部を南から北へのびる那珂丘陵があり、丘陵上や丘陵端部には弥生~古墳時代以降の遺跡が濃密に分布している(比恵遺跡群)。比恵遺跡群内では第1次~第8次調査により集落や墓地のほか、弥生前期の水田稻作に伴なう遺構・遺物が検出されている。

御笠川石岸の古砂丘上に立地する吉塚遺跡群内の東光院からは弥生時代中期の縗棺墓が確認され、那珂川石岸の住吉神社付近からは銅矛511・銅戈6口が発見されている。一方、旧比恵川の北側の古砂丘に立地する博多遺跡群内では1976年の地下鉄工事に伴なう発掘調査以来、20数次の調査が行われ弥生時代の墓地、古墳時代の集落・墓地などが検出されている。

この一帯の歴史的環境についてはこれまでいくつかの説明があるので、ここではあえてくり返さず既知の遺跡の中で弥生時代の遺跡をあげると次のようになる(1984年2月現在・遺跡の位置は別図1参照)。

- | | | | | |
|---|--------------------------|------------------------|---------|----|
| ① | 比恵遺跡群内第1次調査(1938~39) | 環溝住居址4、縗棺12) | 比恵環溝住居址 | 注③ |
| ② | 同上 第2次調査(1952) | 環溝1、土塙3、縗棺18以上、小窓穴) | | 注④ |
| ③ | 同上 第3次調査(1966) | 溝、縗棺2、貯藏穴8) | 春住遺跡 | 注⑤ |
| ④ | 同上 第4次調査(1979) | 縗棺12、貯藏穴6、杭列木器) | 端穂遺跡 | 注⑥ |
| ⑤ | 同上 第5次調査(1981) | 竪穴住居址42、掘立柱建物12、井戸3) | | |
| ⑥ | 同上 第6次調査(1982) | 竪穴住居址9、縗棺44、土括3など) | | 注⑦ |
| ⑦ | 同上 第7次調査(1983) | 竪穴住居址3、掘立柱建物20、井戸19など) | | |
| ⑧ | 同上 第8次調査(1984) | 竪穴住居址他) 春住遺跡隣接地 現在調査中 | | |
| ⑨ | 博多遺跡群内地下鉄関係A・B区(1977~78) | 東長寺前 弥生中期前半 縗棺16基) | 注⑧ | |
| ⑩ | 同 上 I区 (1979) | 弥生終末期 縗棺2基) | | |

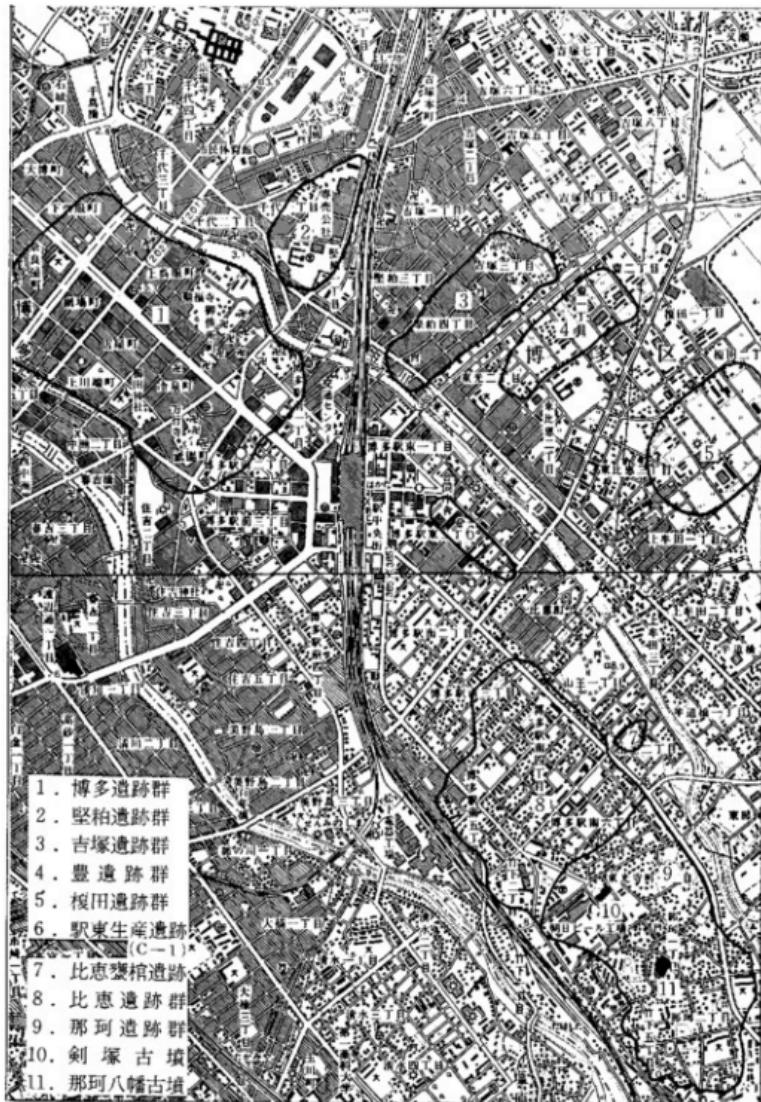


Fig. 1 駅東三丁目周辺の遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

- ⑪博多遺跡群内第1次・第8次調査 (1978・1980 東長寺内 龟棺7基)
- ⑫ 同上 第4次調査 (1979~80 龟棺の破片)
- ⑬ 同上 第12次調査 (1981 終末期龜棺の破片)
- ⑭ 同上 第22次調査 (1983~84 天福寺内 中期龜棺)
- ⑮吉塚遺跡群内東光寺遺跡 (弥生中期の龜棺)
- ⑯住吉神社遺跡 (銅矛5口、銅戈6口一括出土、伝世品)

注⑨

注⑩

II 発掘調査の概要

試掘調査は1976年3月1日塩屋・力武が行なった。開発申請地の現状は水田であったため、畔に平行して東西方向に3ヵ所、畔と直交する南北方向のトレンチを4ヵ所設定して土層断面の観察と埋蔵文化財有無の調査にあたっている。基本層序は耕作土下に30~40cmの褐色粘質土1.0~1.5mの砂と粘質砂の互層、更に砂層とつづく。申請地の北東寄りに設定したトレンチで南東から北西方向へ連続する杭列を検出した。砂層には古墳時代の土器が認められたので、杭列の性格や構築時期を明らかにするため本調査が必要とされた。

本調査は1977年9月12日着手した。本調査は申請地の北東側で検出された杭列の広がりを追う形で進めていった。(調査日誌により経過を説明する。)

- 9月27日 杭列の上端は耕作土下の浅い部分にある。出土遺物は糸切りの土師器皿・弥生の壺・器台の小片が砂層に混在している程度で、杭列の時期を決定しがたい。
- 9月29日 雨。地質業者協会の福岡平野地盤図作成の例会に出席し、駅東3丁目周辺11ヵ所の土質柱状図をトレース。
注⑩
- 10月13日 杭列の写真撮影。(北東から南西方向へ約50m以上連続している。)
- 10月14日 今日から縦横断の実測開始。杭列は直線状にのびるのでなく、2~3ヵ所で屈曲している。杭上端の高さが異なるものがあり、時期差を示すと思われる。
- 10月17日 A列東側の上部には竹や小枝・ワラ等を交互に組合せた柵が残っているため、杭連結の形状がわかる(19~21の杭の間)。
- 10月18日 杭の取上げ開始
- 10月27日 現場作業終了。

なお、申請の南西側に入れたトレンチでも別の杭列を検出したが、試掘調査から本調査に至る間に基礎の杭打ち作業、北西側の一部では本体の鉄骨組立て工事まで進行した段階で中断するという協議の不手際があったため、北東側以西については不明。

III 調査の記録

第1地点

公団の調査地点を第1地点とし、北西部で緊急調査を行なった神山ビルを第2地点とした。第1地点からつづく杭列が道路をはさんで第2地点まで続いており、これは同一遺跡としてとらえる必要性がある。このことから緊急調査した第2地点の報告も今回の附編として報告する。第1地点は南東から北西にかけての杭列と南に12mはなれ平行に走る杭列を検出した。発掘調査面積は2,196m²でその主体となる遺構は杭列のみであった。

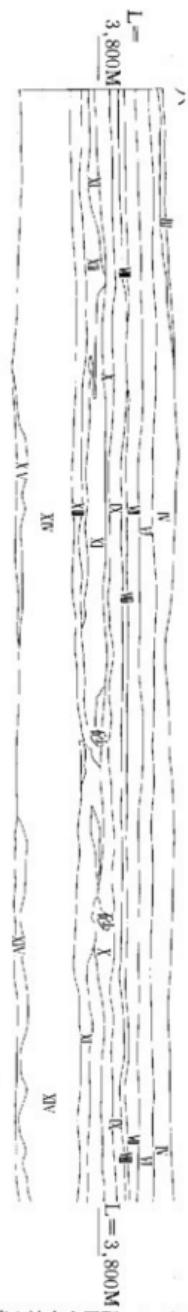
I. 上層

I 層 客土	IX 層 泥炭質の黒褐色土
II 層 農作土	X 層 黒褐色砂質土
III 層 水田耕作床土（明褐色土）	XI 層 泥炭質の黒褐色砂質土
IV 層 褐色砂質土	XII 層 砂層
V 層 茶褐色粘質土	XIII 層 泥炭層
VI 層 褐色粘質土	XIV 層 泥炭層と砂との混合層
VII 層 茶褐色砂質土	XV 層 青灰色シルト層
VIII 層 黄褐色砂質土	XVI 層 砂層

以上が第1地点の基準層序である。土層の堆積状況をみると南東部では砂、粘質土、砂質土、泥炭質の上層が細かく堆積しているのに対して北西部では上部の砂層（X層の砂質土を示す）がかなり厚く堆積している。また中央部ではよどみの現象にみられる泥炭層がある。これらのことから一時期は流れが急で、一時期はよどむ様な状態があったと考えられる。北西部では泥炭層をとりのぞくほどの水の流れの速さによって砂が運ばれてきた状態もみられる。

ボーリング資料や地質学的資料によると第1地点に地表下-3.9m～-5.75m、第2地点では、-4.60m～-5.50mに火山灰があり、これをはさんで上下とも砂層となっている。-8m前後では第三紀層がある。これらのことから第1・2地点とも凹地で水が流れている状態であったことを物語っている。

杭列は第III層に杭の上端が認められ、恐らくこの部分から打込まれたと思われるがシガラミ等から考えるとV層から上端部は地上に出ていたものと考えられる。



北壁土層断面図

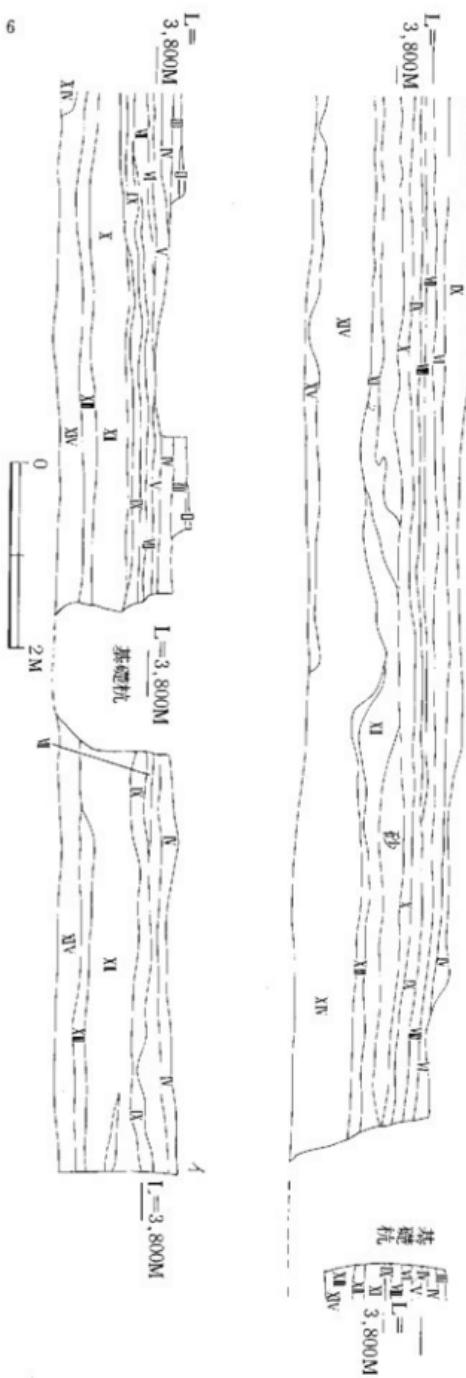


Fig. 2 第1地点土層図-1 (縮尺 1/60)

南號土層斷面圖

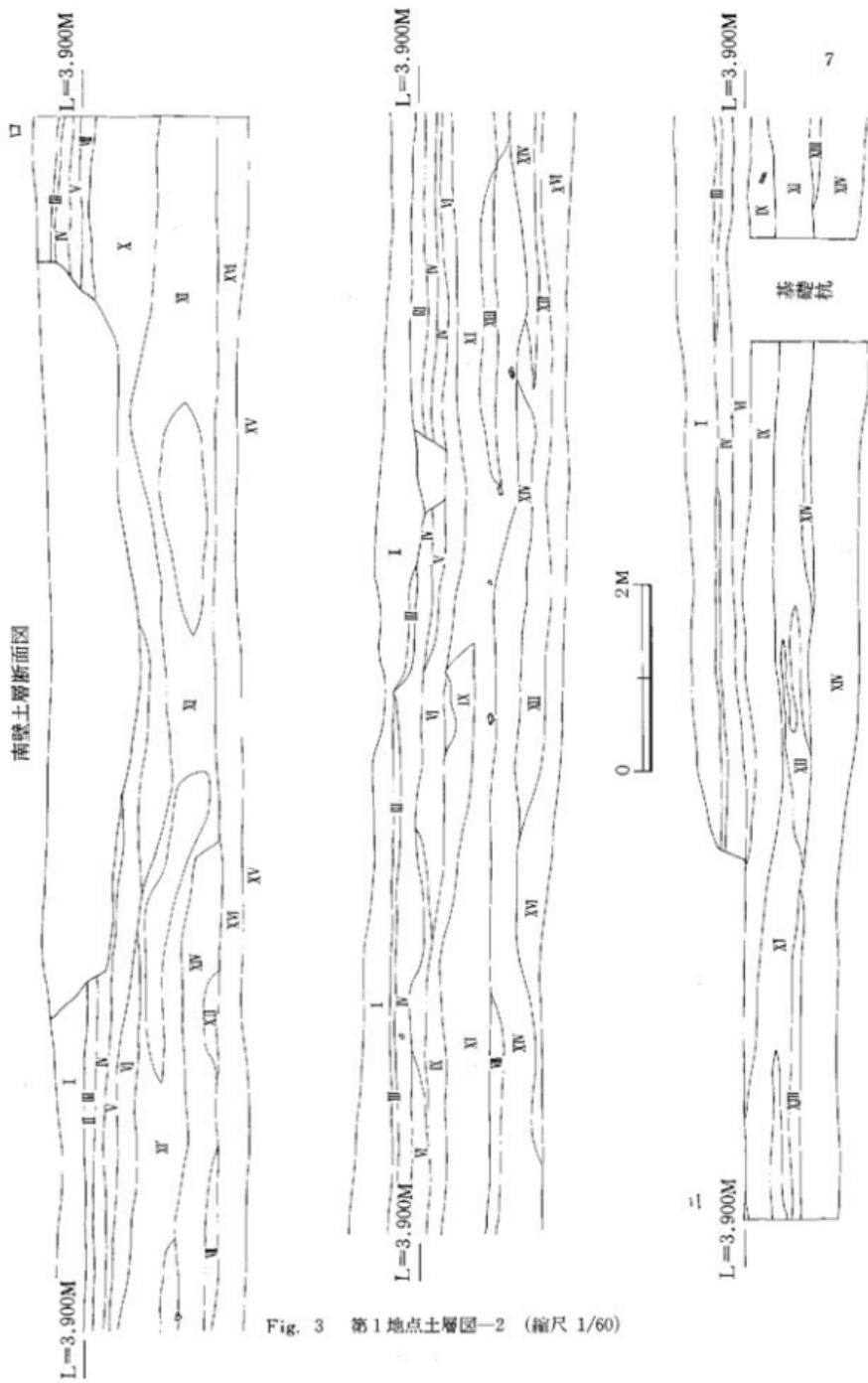


Fig. 3 第1地点土層図—2 (縮尺 1/60)

L=3,900M
N
W
M
V

L=3,900M
N
W
M
V
基础杭
XIV
XIII
XII
XI
X
IX
VIII
VII
VI
V
IV
III
II
I

0 2M

L=3,900M
N
W
M
V

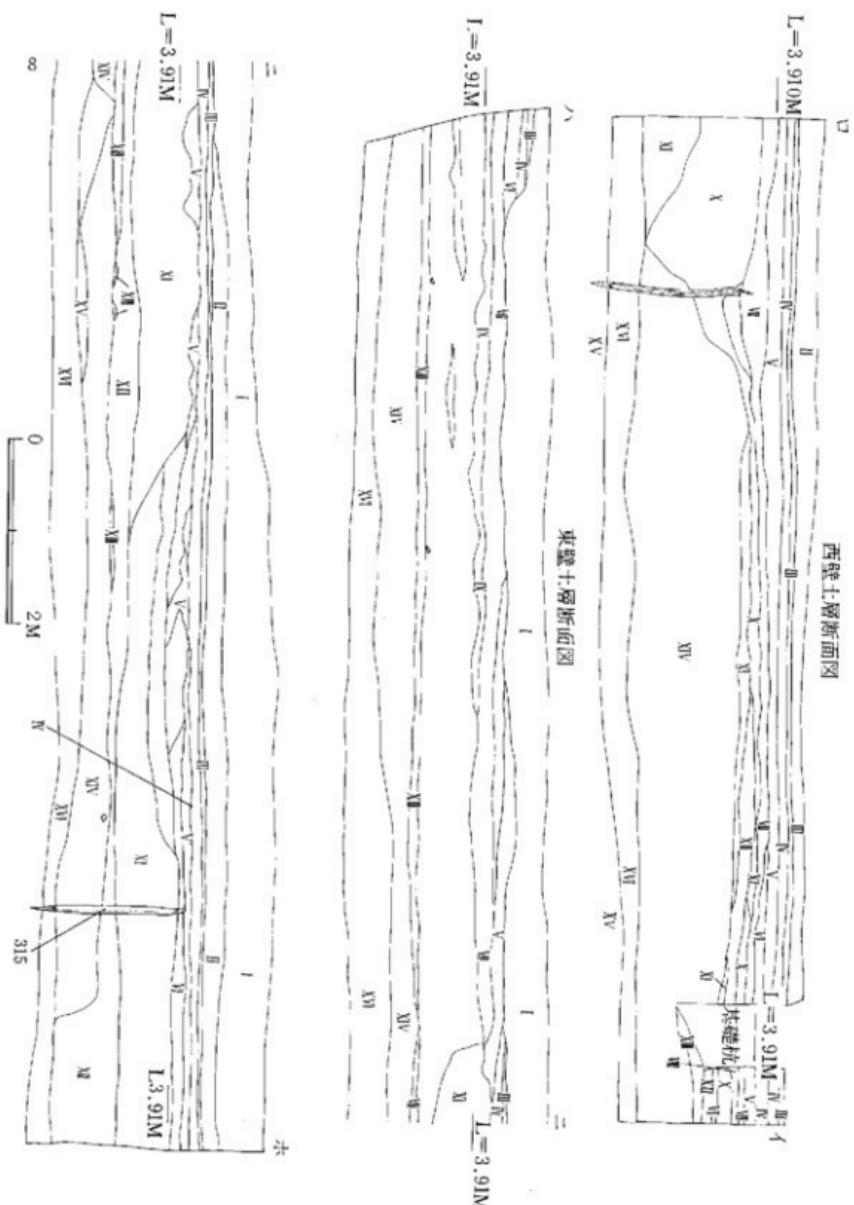
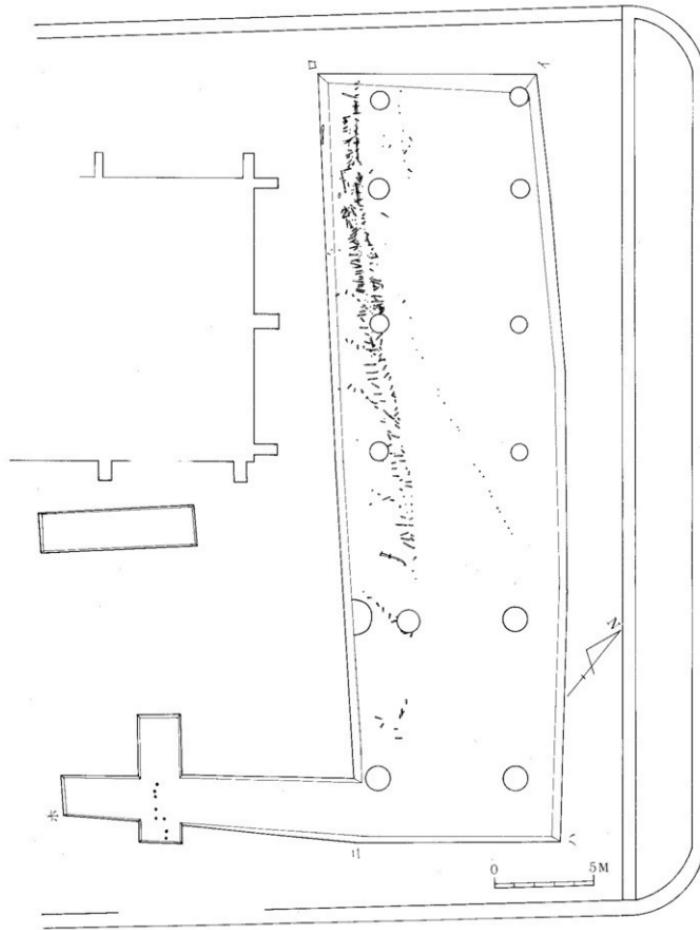
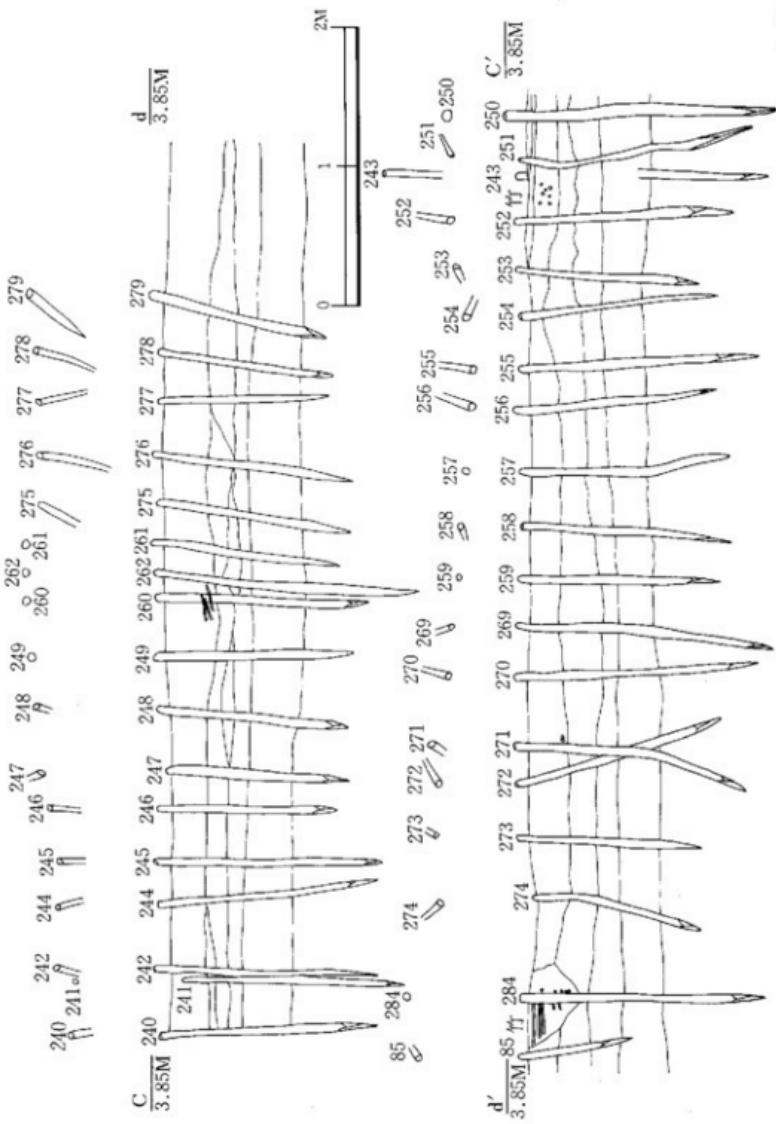


Fig. 4 第1地点土層図—3 (縮尺 1/60)

Fig. 5 第1、2地穴遺構配置図 (縮尺 1/200)





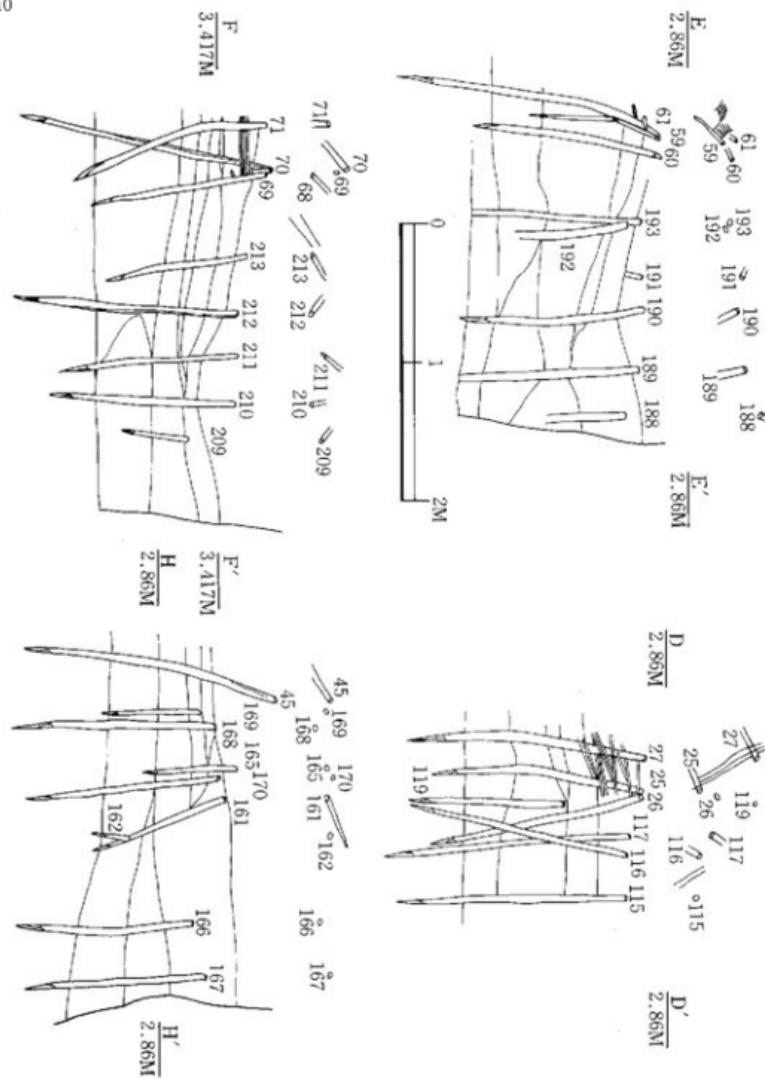


Fig. 7 杖列見透し図-2 (縮尺 1/40)

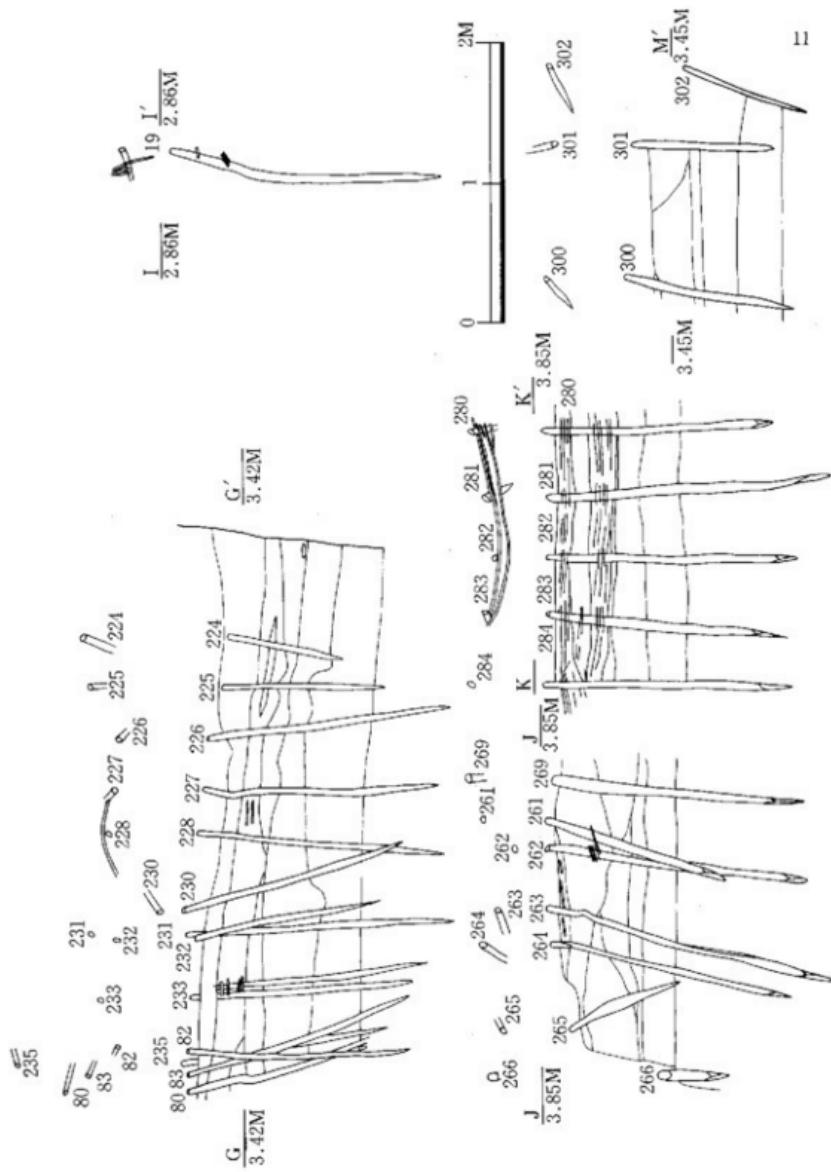


Fig. 8 桁列見透し図—3 (縮尺1/40)

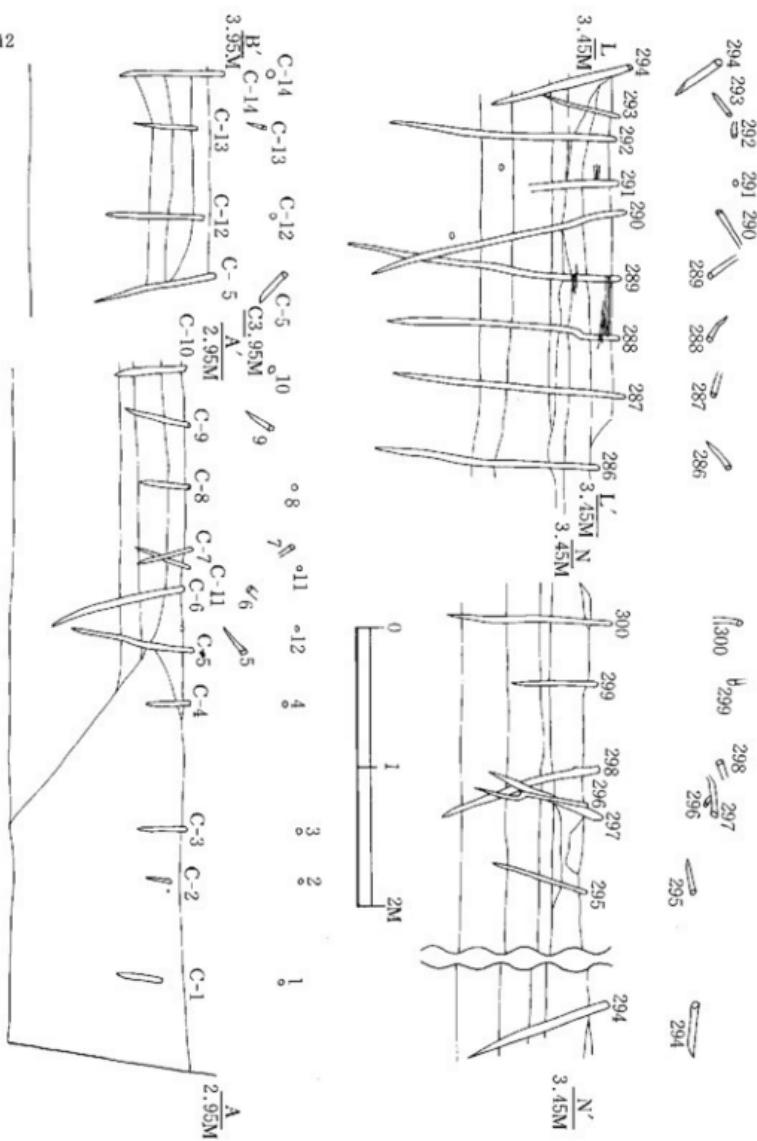


Fig. 9 桁列見透図-4 (縮尺 1/40)

2. 遺構

第1地点の遺構は、堤防状遺構が検出された。3ヶ所に同一方向に並ぶ杭列があり、これらの杭列を便宜上南からA列、B列、C列として呼ぶことにした。この3つの杭列の中で堤防状の護岸杭として認められるものは、A列とB列で、C列は補強用および水路の杭列と考えた。

A列

A列は調査範囲が限られたことでもあったが、延長5mの間に8本の杭が打込まれている。北西部にはつづかず南東部につづく杭列と思われる。方向的にはB列とほぼ平行に並ぶものでB列との距離は約20mの間隔がある。杭は、ほとんど1mを越すもので径も5cm程度である。これはB列の主体をなす杭でも同様のことが上げられ、一応堤防状遺構の杭列と考えられるものを平均値を出してみると長さが160cm、径が5.5cmであるのに対し、補助杭と考えられる杭の平均値は、長さが31cm、径が2.7cm程度であることから、この差の根源を考えた時に長さの長い方を主要な杭、短い方を補助杭として考えた。

C列

B列の前にC列の杭をみると、C列はB列の北側に位置し、方向的には東南東から西北西に杭一条が並びB列に接する手前で南東から北西の方向に折れまがりB列と平行につづく。延長24mの間に37本の杭が打込まれている。C列の杭は短いのがほとんどで平均値を出してみると長さが31cm、径が2.7cmである。このことはA列、B列の主要杭の平均値、長さが160cm、径5.5cm以上に比べても明らかに意味を持つもので、主要な護岸用杭とはならず、A・B列と同時期と考えた場合に補助杭か、小さな溝の杭列としか書けられないものである。またB列の中にもC列の杭と同様の長さ径を持つ杭が認められる。これも補助的なものか、もしくはC列に対岸する杭とも考えられる。後者をとれば堤防状遺構のA・B列とは時期を異にする水路とも考えられる。

B列

B列は延長33mの間に221本の杭を幅1mの間隔で2列に配し、南側に張出し部分9ヶ所を配している。この221本の杭は、主要な杭（堤防状遺構に伴う杭と補助杭の2種類に区分した場合主要な杭とは、堤防状遺構に使用されたと思われる杭を示す）の大部分が長さ1.8m以上、径5.5cm以上の丸木杭であるため他の補助的な杭との区別は容易である。

杭を打込んだ状態を見ると（Fig. 7～9）ほぼ4つに区別することができる。

- ① 2本を1組としている。Fig. 6, Fig. 8 G-G'、J-J'
- ② 1本ではあるがシガラミによって結びついているもの。Fig. 8 K-K'
- ③ 杭を交差させ杭自体で強化をはかっているもの。Fig. 7 F-F'、Fig. 9 L-L'

④ 3~5本を集中的に打込んで強化しているもの。Fig. 7 D-D'、Fig. 8 G-G'

このように杭自体にそれぞれ工夫させているが特に①、②にはかならずと言って良いほどシガラミが検出でき③、④でも部分的にシガラミと組合せているものもある。このような方法で杭列は形成されているが、この状態は中央部から北西部にかけての杭列と張出し部分の杭列に認められる。次に張出し部分を見ると、B列の杭列に対し約45度の角度を持って作り出されている。この目的を考えると、水の流れがC列側にあった場合には、この張出し部分の役割は、B列をさえる役目と考えられ、また水の流れがA・B列間にあった場合の役割は、急激な水の流れを柔らげB列を保護する役目をもった施設と考えられるが、この2つの考えの内C列が同時期としてとらえた場合は後者、新しい時期の杭列と考えた場合は前者となるが、前者の場合にA列をどのように捕えればよいかが問題となる。ここでは一応、A・B列間に水路があり、B列を保護する役目を持った施設として張出し部分を考えておきたい。

B列における遺構上端面を考えてみると、その時代の地表面を考察することで解答が得られるものと思われる。この問題に直接的に関与してくるのがシガラミである。シガラミは杭の上端から30~40cm下にある。土層ではV層茶褐色粘質土からⅤ層の褐色粘質土である。シガラミは竹、木（小枝2cm~2.5cmのもの）、ワラで構成されているが大別すると北半分は竹が主体で南半分が小枝、ワラである。Fig.8の杭280~284の間を例にとると上に横の竹を2本（径1.5cm~2.5cm）、中央部は4本、下に2本となる。2~5本を一束として交互に組合せている。また竹の場合、横の杭列をつなぐ役目のほかに縦の杭間にも認められ、縦横の杭をしっかりと結びつける役割をしている。このシガラミが認められる土層は、下層の砂と泥炭層の互層とは異り粘土であることは注目せねばならない。つまりシガラミの上端部を上限として杭の上端部は地表に露出していたと思われる。また杭には打撃痕を残す完形（138、202、215、212~223他）があり、その標高は3.86m、シガラミの上端は3.50mである。これらのことから堤防状遺構の上端はシガラミの上端と考察できる。この考え方からシガラミを形成した時期が問題になるが、シガラミの土層中より弥生式土器、古式土師器、須恵器、石鍋、土師器皿（糸切り）等（Fig. 10 P.L. 14）が混入していた。これらが構築時によるものだとすれば、石鍋、土師器皿（糸切り）が一番新しいものであり、これ以降の遺構と考えられる。

以上のことからA・B列の間、20cmが河川（溝）と考えられ、B列の張出し部分は水流を弱めると共にB列の堤防状遺構を守る目的で作られたもので、現在は御笠川（石堂川）の左岸に遺跡は位置しているが付図-3をみると南側に条里がみだれている場所が認められる。これは御笠川がかなり蛇行していたことを物語っている。これは当遺跡の周辺部でも同様でたびたび河川の氾濫により被害を受けていた様相が土層上でも明らかである。

3. 出土遺物 (Fig. 10. PL. 14~16)

出土した遺物は、土器・石器・青磁等があるが、遺構の性格上遺物の量も少なく、二次堆積によるものがほとんどである。杭を打込み堤防状遺構を築造する時点でシガラミを編んで杭列を固定している層の中から出土した土器がこの堤防状遺構の時期を決定すると思われたが、弥生式土器から土師器皿（糸切り）まであり、その時期を決定するにいたらなかった。出土した遺物のほとんどが磨滅を受けており、量的にも砂層から出土したものが多いが、図示できるものはほとんど無の状態である。シガラミの中からも少量の土器・石器が出土したが多少無理して図示した。杭列だけの遺構であるため杭が中心となることはやむをえなかつた。

a) 土器 (Fig. 10—1~8)

砂層やシガラミの中から弥生式土器～土師器皿（糸切り）までの時期が出土したが、そのほとんどが磨滅している。

Fig. 10—1は弥生中期壺形土器の底部である。磨滅は受けていない。表面の調整もていねいなハケ目調整を行なっている。2・3・4は須恵器、2・3は环身で2が須恵Ⅲb、3は須恵Ⅳであろう。4は赤焼きの須恵器と呼ばれている高环脚部の环部接合部分で両側に透し部分が認められる。5は土師器皿（糸切り）である。内外とも赤褐色を呈し、胎土は3~4mmの砂粒を含む。ロクロ回転は右回転で指ナデで仕上げている。6は瓦器である。スリ鉢と思われる。7は魚住式土器と称せられるもので、口縁部が玉縁状を呈し丸みを持つ。8は龍泉系窯青磁碗である。1~3は砂層（X層）、4~7はシガラミ中（貝層から出土）に竹・小枝とともに出土。8は砂層（X層）から出土した。

b) 石器 (Fig. 10—9~11)

石器も土器同様に砂層から少量出土した。9は黒曜石の末端部を切断した剝片である。両側刃に二次加工が認められるが、多少ローリングを受けているのでこの時に加わった力によるものかもしれない。バテナは古く、剝離方向も一定している。10も黒曜石の剝片である。自然面を持つ剝片調整剝片であろう。ローリングは受けていない。11は花崗岩製の磨石である。端部に打撃痕が認められる。

c) 杭

杭は全体で353本検出した。このほとんどが丸木杭であるが、他の部材（建築部材の代用とか農工具が混在）はまったく出土しなかつた。

本遺跡では杭が最大の遺物であり、他の遺物の数は少なく、時期を決定しうる遺物は、杭列という遺構の性格上無に等しいものであった。出土した杭の総数は353本である。A列が35本、C列が34本で、杭列の主体となるB列からは284本である。

16

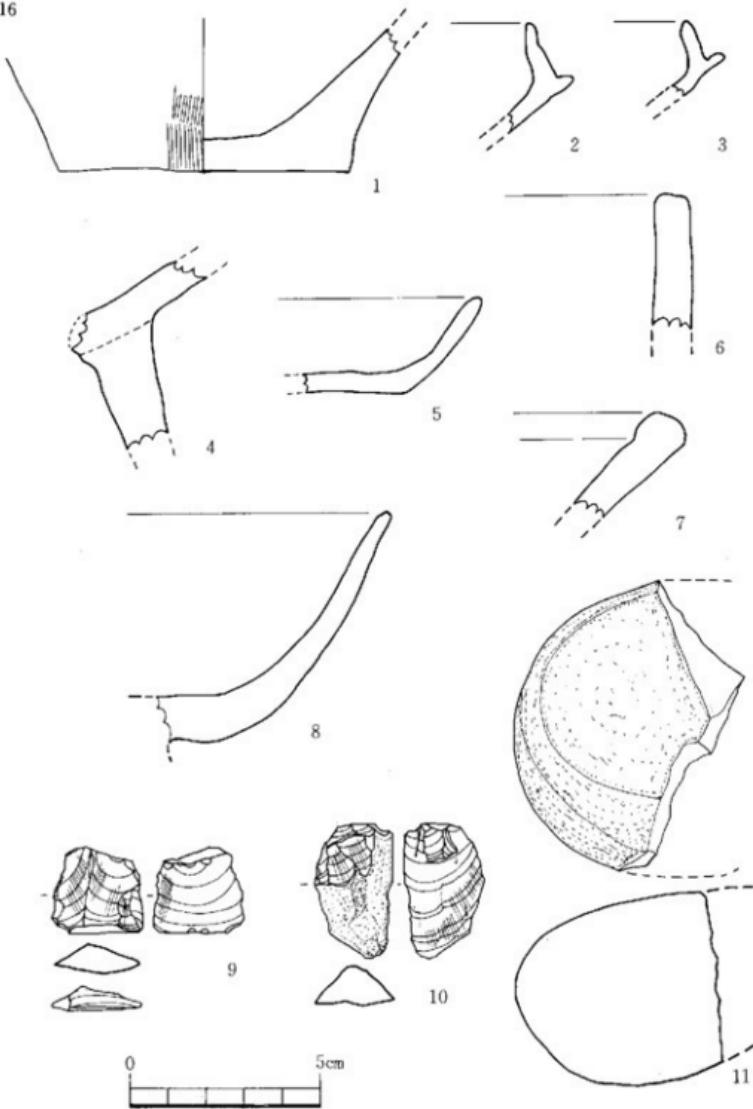


Fig. 10 遺物実測図 (縮尺 2/3)

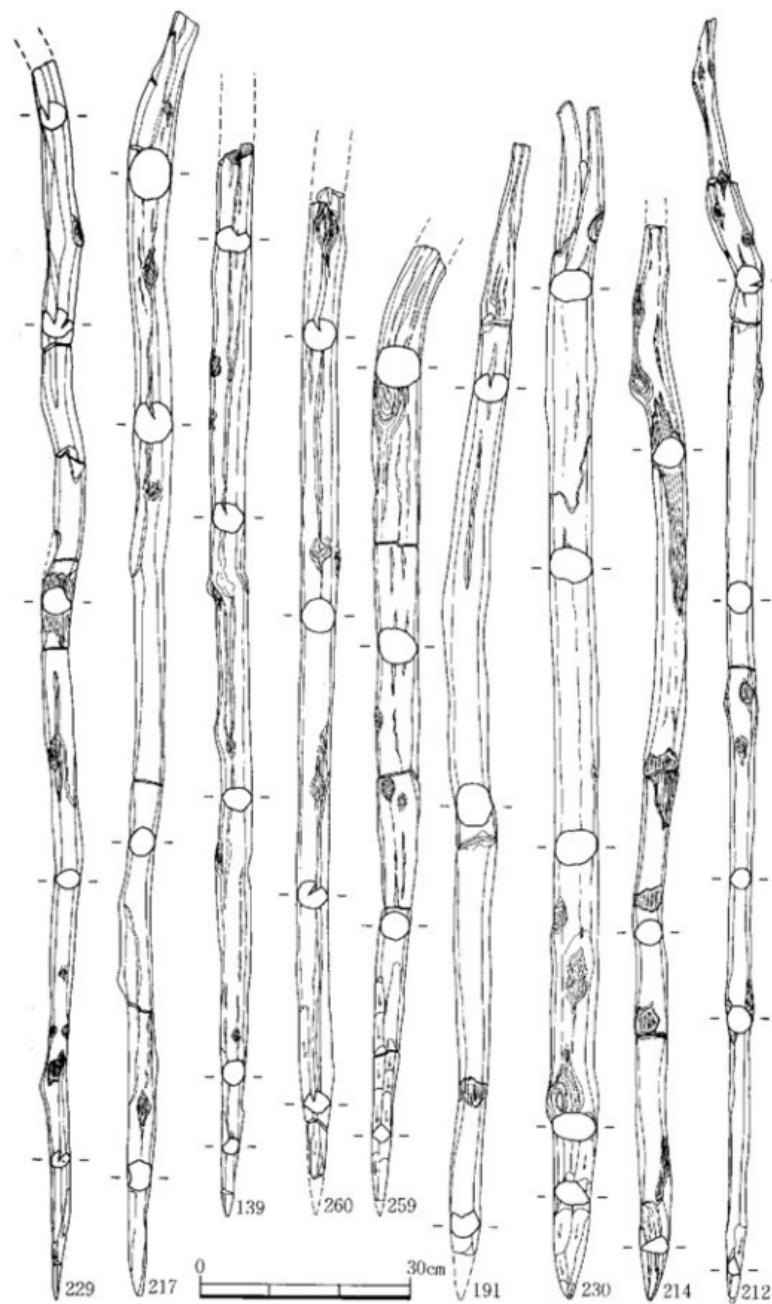


Fig. 11 桧実測図—1 (縮尺 1/8)

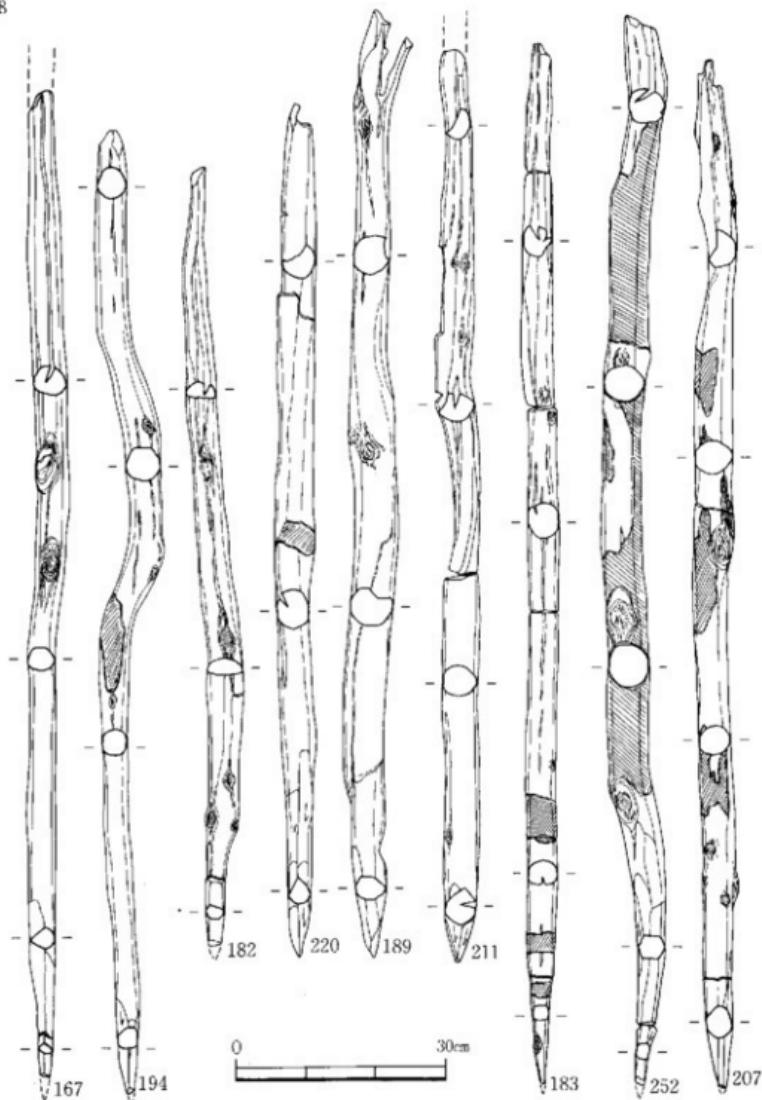


Fig. 12 杭実測図-2 (縮尺 1/8)

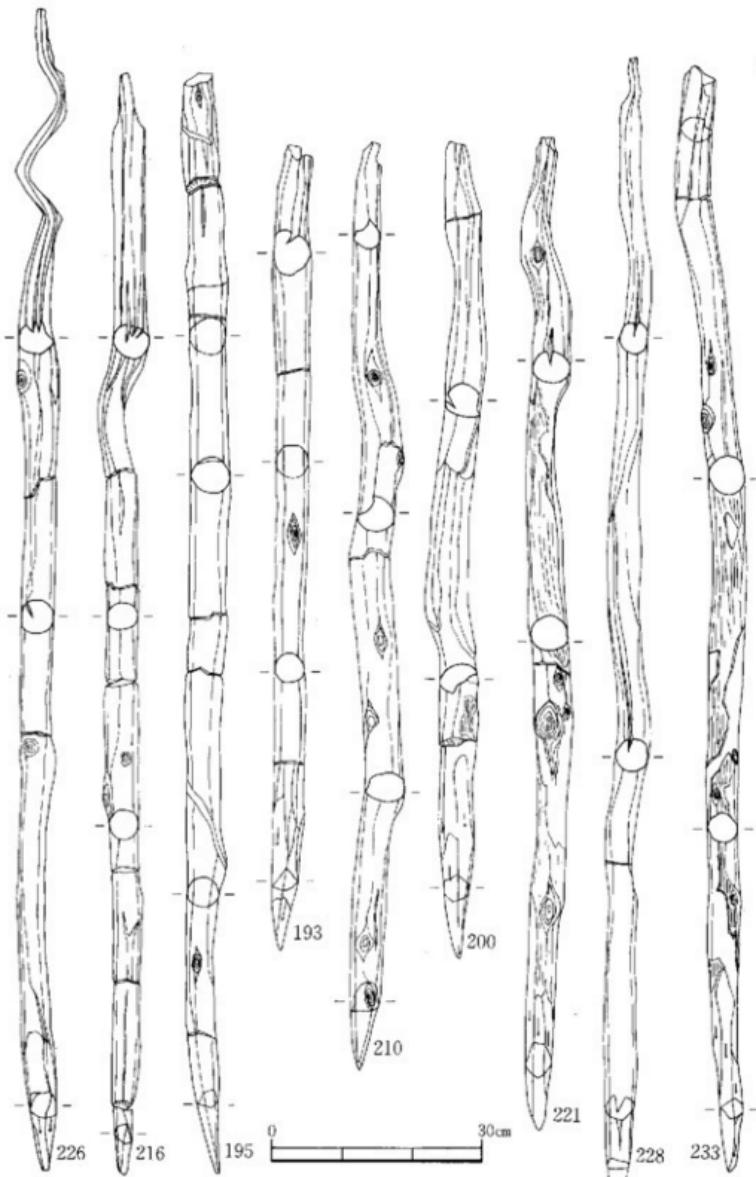


Fig. 13 桧実測図一3 (縮尺1/8)

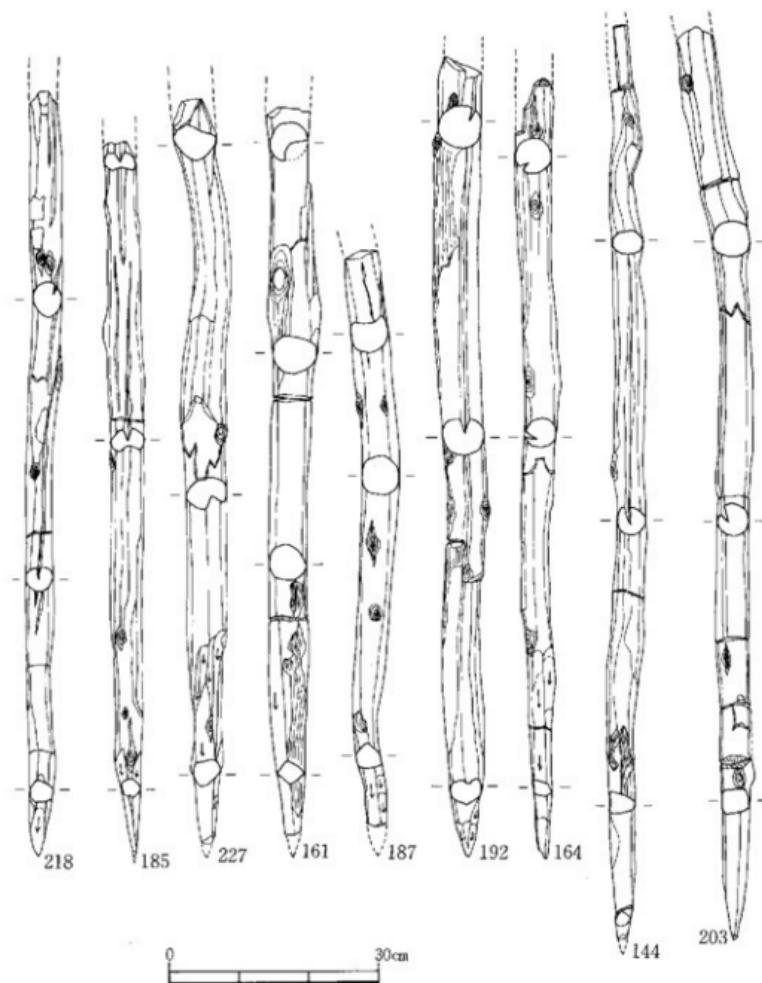


Fig. 14 杭実測図—4 (縮尺 1/8)

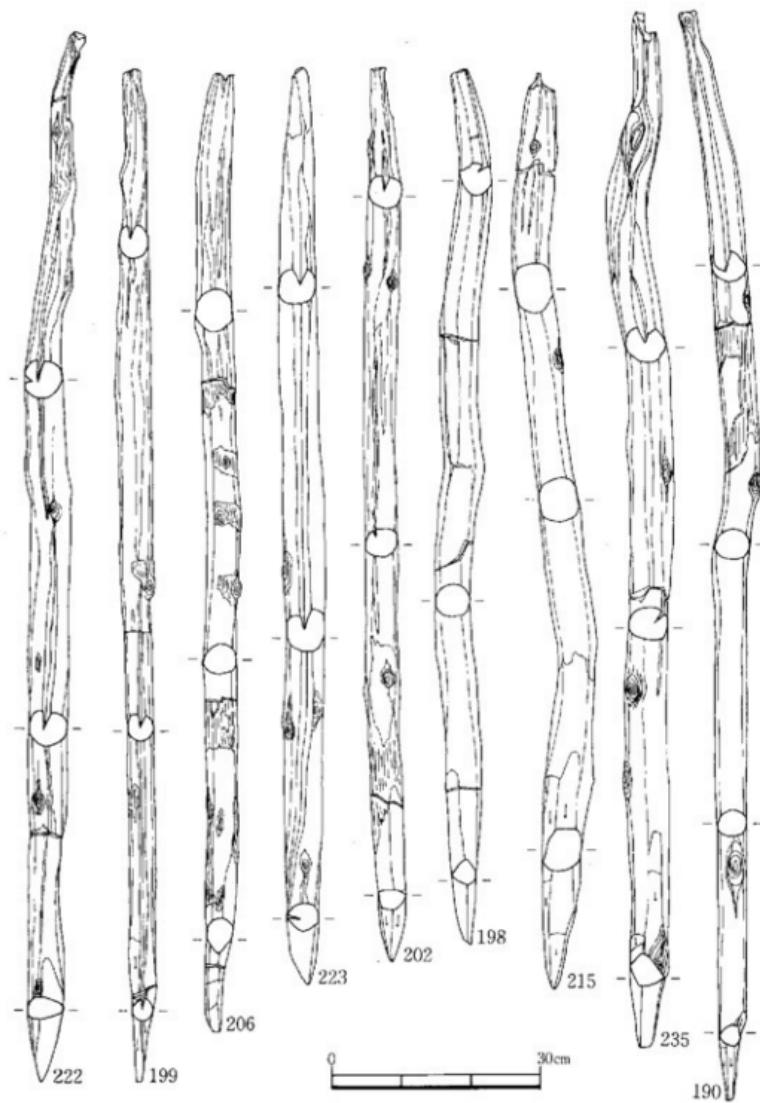


Fig. 15 桧実測図—5 (縮尺 1/8)

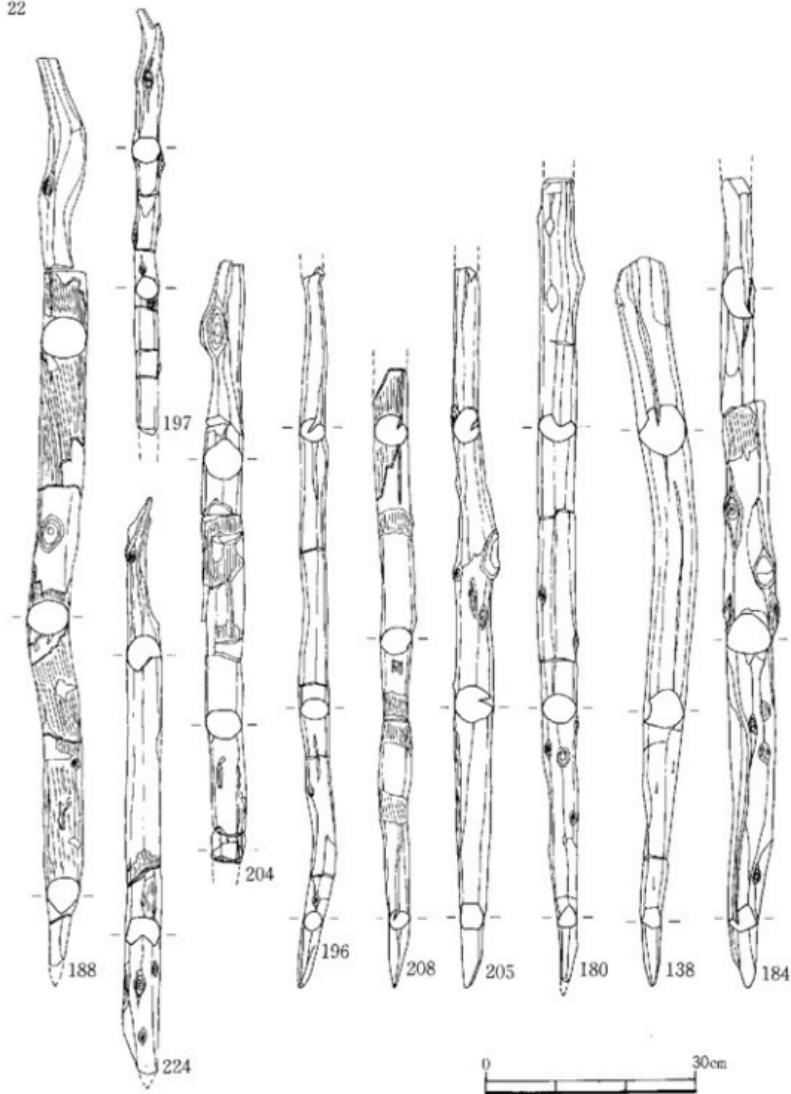


Fig. 16 杭実測図-6 (縮尺 1/8)

図示した杭は、55本で総数の約6分の1の割合である。その中で打撃痕のある完形品が54点出土しており、図示した中に9、19、20、26、37、41、44、45の8点がある。これらの完形品から杭列が打込まれた土層が明らかとなるし、標高によってもこの堤防状造構がどの時期に位置するかの一つの手がかりとなる。また杭列に編んであるシガラミとの組合せによっても4つのタイプに区分される。杭はそのほとんどが丸木杭であるが堤防状造構の主要杭の長さ、径と護岸用の補助杭の長さ、径との比較は、主要杭列の長さが180cm程度、径が5cm～9cm、これに対して護岸用の補助杭は50cm未満、径も3cm未満である。直徑の5cm以上が180本、5cm未満が173本、長さ150cm以上が141本、150cm未満が212本ある。この資料によっても主要杭と補助杭との区別ができる。

4. 小 結

第1地点でのまとめとして堤防状造構と結論づけたが時期的には出土土器が少量でそれも二次堆積によるものであるため決定づけられなかった。ただシガラミの中から一番新しい土器として糸切り土師器皿が出土していることから中世より新しいものであることは結論づけられるであろう。杭列で明らかとなったことはシガラミによる杭の打込み方の相違である。1本が単独である場合はシガラミにより固定化される例、2本を単位として交差する打込みにより固定させる例、数本により一直線に打込み、その部分を特に強く固定させる例である。シガラミも小枝・竹・ワラ等を使用しているが、北半分は竹、南半分は小枝・ワラが主体をなす。特に北半分の竹の使用方法は、張出し部分との接続や、横の杭との接続を考えられており縦横に編み込んでいることである。またシガラミ自体上下2段に形成され、構築されている。また杭の中に樹種の相違が認められる。樹種鑑定は行なっていないがおそらくカシとマツであろう。

杭の中に打撃痕のある完形品が54点もあることは、造構の上端から下端まではほぼその様相をとらえることができたことは造構の性格をきめる上で重要であった。これにより主要杭列と補助杭との区別がとらえられ、水流がどちらの方向へ流れているかが判明できた。

御笠川(石堂川)は大友氏の石堂川工事前は那珂川の方向に流路があったと言われている。また古地図にも条里が非常に良く残っている地区であるが、比恵台地の末端部である山王附近を境にしてかなりの蛇行が認められ、現博多駅と調査地点の間から住吉神社の方向へ流れていたと思われる。これらのことから堤防状造構の構築時期は中世以後と考えられ、この一帯で石堂川の水を制圧することができたのは更に新しい時期と考えられる。

第2地点

公団駅東三丁目遺跡の調査開始以前に西側にて造成工事が行なわれており、杭列が発見されたため緊急に対策を講じ、公団の調査前に発掘調査を行なうこととした。

公団駅東三丁目遺跡と同一遺跡の範囲にとらえることができ、駅東三丁目遺跡から検出される杭列につづくもので同じ堤防状構造と考えられた。公団駅東三丁目遺跡を第1地点とし、道路をはさんだ神山ビルを第2地点とし、付録として付加えた。

1. 土層

基本的には、第1地点の土層と同じであるが、P.L. 13でもみられるごとく部分的に、砂がかなりの厚さで堆積している。基本的には下記の層序が基準になる。

第I層	客土	第IV層	青灰色シルト	荒砂によって 流されている 部分がある。
第II層	灰褐色粘土層(水田耕作土)	第V層	細砂	
第III層	黄褐色粘土層(床土)	第VI層	泥炭層	
第IV層	茶褐色粘土層(Ⅲ層とⅤ層の間に砂の間層)	第VII層	青白色と泥炭の互層	
第V層	暗褐色粘土層	第VIII層	黄色味をおびた砂層	

この層序を第1地点の層序と比較するとⅠ、Ⅱ、Ⅲ層は現代面の客土、耕作土、床土で変化はない。Ⅳ層は第1地点のⅤ層に、Ⅴ層はⅥ層に地定できる。Ⅶ層以降は第1地点でⅧ層、Ⅸ層がⅩ層、Ⅹ層がⅪ・Ⅻ層、Ⅺ層がⅬ層となる。第1地点のⅩ層からⅪ層までは第2地点のⅤ層に比定できるが、この部分には荒砂が多量に堆積していることとⅤ層自体青灰色のシルトと泥炭層との互層部分であるため第1地点のⅩ層からⅪ層までがこのⅤ層に比定できると思われる。ゆえに基本的には第1地点の層序ととかかわりがなく、水の流れによって形成された土層(沖積地の形成、河川の流れのあり方を物語っている)である。Ⅺ層にみられた荒砂の堆積は第1地点地面側で同様の層序が認められており部分的及び時期的に水の流れが急激に流れる部分があったものと思われる。

杭列は、第1地点と同様に第Ⅳ層茶褐色粘土層より打込まれている。この第2地点ではシガラミは検出できていないが、第1地点同様にⅤ層、Ⅵ層がシガラミを形成する層位であったものと思われ、部分的に荒砂によって流されたものと思われる。現在の湧水点はⅩ層の黄味をおびた砂層(標高1.34m)で御笠川(石堂川)の水位と同じである。

ボーリングデーターと地質学資料によると地表下-0.6mまで砂質粘土、-1.40mまで中砂、-3.40mまでシルト混り砂、-3.70mまでが火山灰質細砂、-4.60mまでがシルト混り中砂、及び微粒砂、中粒砂、-5.50mまでが砂質粘土、-7.80mまで礫混り粗砂で(及び中粒砂)この

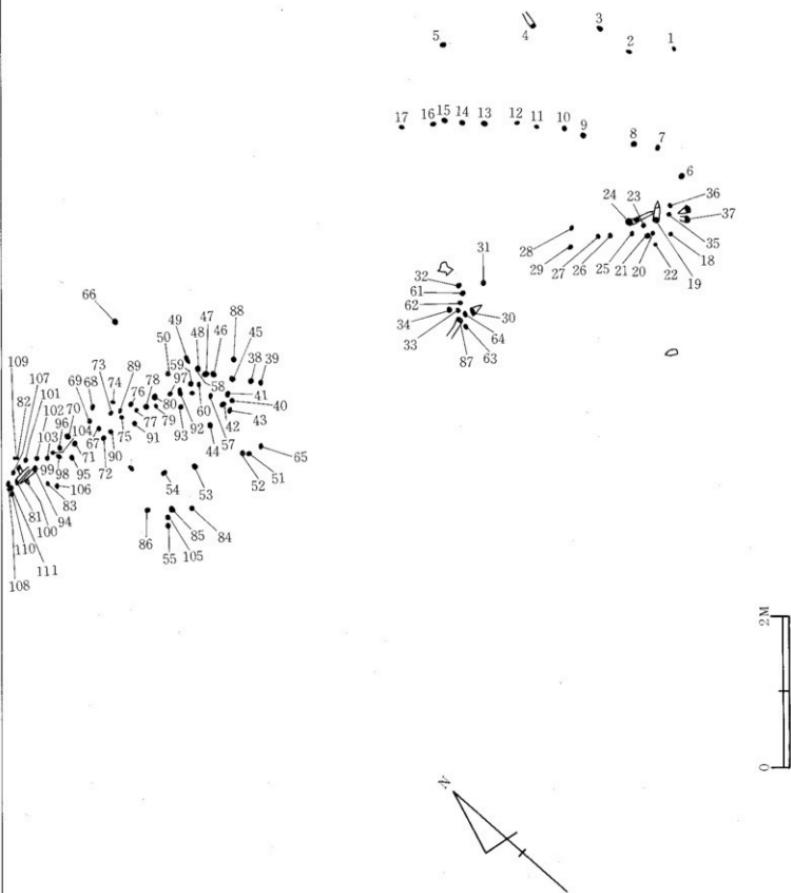


Fig. 17 第2地點測量圖 (縮尺 1/100)

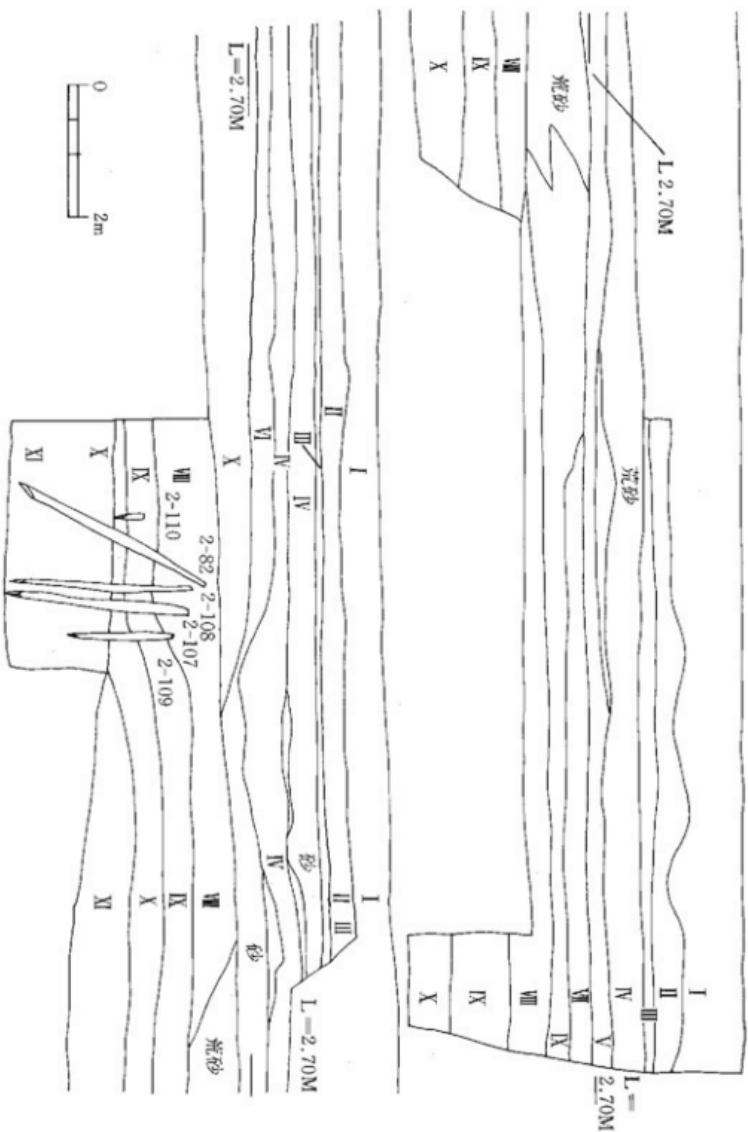


Fig. 18 第2地点土層図・杭列見透し図（縮尺 1/40）



Fig. 19 第2地点杭実測図一 (縮尺 1/8)

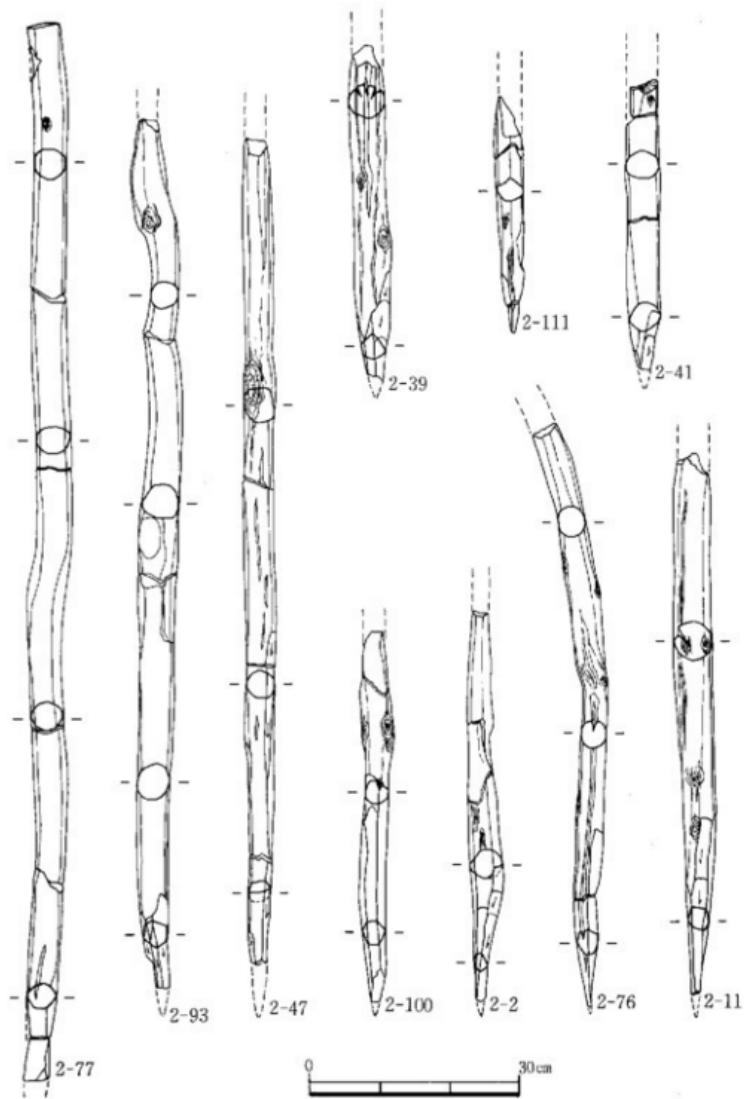


Fig. 20 第2地点杭実測図一2 (縮尺 1/8)

下は第三紀層となっている。第1地点、第2地点とも杭列の下端は、シルト混り砂、中粒砂中に位置している。

2. 遺構

Fig.17,18にみると第1地点と同様に南東から北西にかけて111本の杭が打込まれている。まだ北西部には杭列がつづくものと思われる。杭列は、途中で2ヵ所とぎれており、意識して空間を作っているものか、水流によって流されたものは不明である。ほぼ中央部に2列に並んでいる所は第1地点と同様である。その周辺部に補助用杭列があることも第1地点と同様であろう。Fig.17の杭列番号1～5、6～17の2段の杭列は18～34までの杭列の補助用杭列で護岸のためか、再度打込まれたものであろう。ただこの杭列の両側にまったく杭列のない部分が2.5mほどあり、補助杭等もこの部分で終了している所から水の取入口、排出口の可能性もある。これの北西側につづく杭列はさらに北西側に延びていると思われるが範囲外であるため不明である。この杭列も基本的には2列の杭列からなる堤防状遺構で両側に護岸用の杭列が並ぶ。第1地点の杭列の左側に流れがある。これのつづきである第2地点も杭列の左側に流れがあったものであろう。

3. 出土遺物

a) 土器・石器

砂層中、泥炭層より小片であるが弥生式土器、須恵器、土師器皿(糸切り)、青磁片等が出土しているが図示できるものはなかった。これも杭列遺構の特殊性で、時期を決定するものはないが、一番新しい遺物は土師器皿(糸切り)で、これも第1地点と同じである。

b) 杭

111本の杭が出土した。主要杭列は5cm～7cmの丸木杭でほとんどが長さ100cmをこえるものが主である。これに対して護岸用の杭列は5cm未満で長さも100cm以下であることは注目にあたいする。これは第1地点でも同じである。

4. 小結

第2地点も第1地点と同様に堤防状遺構のつづきで、さらに護岸用の補助杭も第1地点と同様に打込まれている。第2地点での特徴は2ヵ所に杭列がとだえているところが水の取入口、排出口と考えられる部分がある。杭もほとんど丸木杭であるが、2点ほど板材と割材がある。径も主要杭列は径が5cm以上、長さが100cm以上のものでこれも第1地点と同様である。

V まとめ

本文で報告した杭列遺構のまとめにあたり、福岡市域内における低湿地調査の既況にふれておきたい。現在まで調査された遺跡のうち、報告書が刊行されているものを一覧表にまとめるとTab. 1のようになる。これ以外でも福岡平野では板付周辺の那珂君体第2次（1984年報告書刊行予定）・那珂久半・野多目後田（現在調査中）、早良平野では四箇周辺、田村、飯盛地区では圃場整備事業にともなう調査（古武遺跡群・1981年以来継続）などがある。

1967年の板付市住建設にともなう調査以来板付周辺での緊急調査が継続されているが、小範囲の調査による検出例が多い。このように狭少な調査多いため遺構の一部を検出するといった場合が大部分で、面的な広がりが把握できるものは少ない。従って水田区画の面積を提示できるものも少ない。また、水路・杭列として統一した用語の中には個別の遺構の性格の差を包括的に取扱っている。

この表を年代順に大別すると縄文時代（1）・弥生時代（21）・古墳時代（15）・古代～中世（13）の4時期に分けることができる。

縄文晩期の板付G-7a・7b地点は、台地と沖積地との境を流れる水路に井堰をもうけ、揚水して水口に取排水の水を調節する施設がある。東西は畦畔によって水田を区画し、南北の区画は確認されていないが、1区画が6~10×50m以上（500m²以上）と大きい。それに木製農具（両手鋤・えふの木製品）・石包丁・炭化米がセットになっており、佐賀県菜畠遺跡を除けば最古期の段階で整備された水利施設・水田区画をもっていたことになる。

弥生前期ではG-7a・7b地点のほか板付II区J-23~26のように沖積地への進出がはじまり、中期以降この傾向は一層顕著になる。井堰などの水利施設の規模も大きくなり、技術の進歩を裏付けている。これら西側沖積地に対し、環濠集落をのせる板付台地の東側端部E-5・6、E-5b地点では縄文晩期の旧河川に弥生前期の段階で水利施設が構築され、水田耕作がはじまる。また板付台地南側のB-12b・c地点では丘陵端部に北流する旧河道があり、縄文晩期（夜臼式土器）以降の遺物が含まれている。G-7a・7b地点やE-5・6、E-5b地点と同様な立地を保しており、弥生前期初頭以降の水田耕作が行なわれていたことが予想できる。また、板付遺跡から1.0km東の諸岡丘陵では丘陵東斜面（G区）で縄文晩期（夜臼式）の豊穴住居址が検出され、隣接地（F区）で縄文晩期（夜臼式）以降の包含層が認められることから、諸岡川を水系とした水田耕作が少なくとも弥生前期以降展開されていたことが推定できよう。

那珂丘陵の先端部に位置する瑞穂では水田址は検出されていないが、丘陵端部に沿って護岸

用杭列がつづき、木製農具（諸手鍬他）が出土しており、弥生前期での水田稻作が知れる。

早良平野では鶴町・捨六町ツイジなどがこれにあたる。いずれも丘陵端部に位置し、縄文晚期（夜臼式）以降の土器や木製農具が出土しており、弥生前期での水田稻作が確認されている。弥生の水田区画は板付E-5・6地点地点の220m²以上の他規模のわかるものが少ない。

水田經營の初期は古墳時代前期にある。福岡平野では三筑で用水路・井堰・水口・水田区画の関係がわかる事例が報告されている。^{注6}板付周辺ではD-7b地点・D-10a・10b地点・那珂深ヲサなどがあり、水利施設の構築技術が一段と進み、井堰の規模も拡大する。D-10a・10bは多量の小型丸底壺完形品が出土し、祭祀行事の知れる遺跡である。

早良平野では原深町・鶴町・四箇などがこの例で、原深町の井堰は水位を50cm以上あげて水路に分水する能力を有している。用水路の長さは50~70m以上と長い。鶴町では建築部材を利用した柵状の護岸杭列を9mと13m構築している。^{注7}水田区画は30~50m²程度ものが多い。

1983年調査された那珂久平では幅40mの旧河道に15,000本以上の杭を配した大規模なアーチ状の井堰を構築・改修しており、これが弥生後期とすれば水田稻作とともにう水利施設の技術の進展と規模の拡大は古墳前期より更に進ることになる。

古代～中世の水田址の検出例も多い。三筑での水田区画は20~150m²と均一でないが、那珂深ヲサでは水田址に人の足跡だけでなく牛の痕跡も認められ、古代以降牛耕の導入が確認されている。この他条單方向と一致する杭列・溝が検出された遺跡もあるが調査例は少ない。

このような調査例のうち今回の杭列遺構と対比できる資料は早良平野の四箇J-10a・f・鶴町くらいであろう。四箇J-10a・f地点は旧河道の東岸に沿って杭列が長さ35m以上つづいている。2列の護岸用杭列で堤防状遺構を構築する。遺構の残存状態は良好でないが建築部材等を横木に使用している。鶴町では柵状の護岸用杭列の残りが良い。旧河道の東岸沿いに長さ4m越す横木を使用した堤防状遺構が検出されている。四箇J-10a・f地点・鶴町とも横木を固定する立杭に1mを越えるものはない。

駅東3丁目の杭列遺構は幅1.2m間に立杭を連続して打ち込み、上端から30~50cmの間に小枝・小竹・ワラなどを柵状に組み連結させて堤防状遺構を構築する。長さは50m以上もつづくが、西側の数ヶ所に立杭による張り出し部を作る。立杭は上端に打撃痕を残すものがあり、標高3.8~3.5mを測る。柵の上部は標高3.3~3mとなり、これが杭列構築時の水位と考えられる。横木はほとんど使用されない点と立杭の長さが1.5mを越えるものが大半を占める点が他例と異なる。これは長大な杭を連続して打ち込み上部を柵状に連結させることで横木の使用を省略したものであろう。水の流れが杭列の西側とすれば西側への張り出し部は本流に対し鈍角に構築されており、水の流れを弱め堤防状遺構本体を保護する役割を果していることになる。西側の杭列の遺存が良好でないのはこれを裏付けるものと考えてよい。

Tab. 1 福岡市低湿地調査一覧表

No.	種	地名	地					成 物	持 地 (ha)	立 地	標高 (m)	第 号	文獻
			水路	林地	青草	灌叢	木林						
1	低	I区D16-32	○	○	-	-	-	-	水生植物	野生稻類草平	丘陵地帶	7.0 (下水田)	
2		II区J23-26	○	○	○	-	-	-	○水蘆	*	冲積地	2.6 (水田)	
3		II区G24-26	○	○	-	-	-	-	野生土苔、木苔	中生地帶	*	7.5 (水田)	
4		Ⅳ区OPO	○	○	○	-	-	-	-	*	後半	*	7.0 (水田)
5		Ⅳ区JK25	○	○	-	-	-	○	-	*	後半	*	7.0 (水田)
6		Ⅳ区MOP	○	○	-	-	-	-	瓦苔、青苔	中生	*	7.0 (水田)	
7		D-12-a	○	○	-	-	-	-	野生土苔、禾本科	後半・古遺	*	9.0 (+)	
8		H-5	○	-	-	-	-	-	-	木苔	旱生地帶	丘陵地帶	
9			○	○	○	-	○	○	○	波氏苔、木苔、其他木苔等	風吹地帶	*	本山2500m以上
10		G-7a+b	○	-	○	-	○	○	○	野生土苔	*	水口丘陵地	
11	中	G-7a+b	○	○	-	○	-	-	-	*	後半	*	
12		D-10a	○	○	-	○	-	-	-	土苔等	*	中生前帶	
13		E-5, 6	○	○	○	○	-	-	-	野生土苔	*	後半	
14		E-5b	○	-	○	-	○	○	-	野生土苔	*	2.2 (水田)	
15		E-5b	○	-	○	-	○	○	-	野生稻類草平	*	2.2 (水田)	本山下部地
16		E-5b	○	-	○	-	○	○	-	中生苔、青苔	*	8.2 (水田)	本山4200m以上
17		D-7a	-	-	-	-	○	○	-	中生苔、木苔	中生前帶	冲積地	
18		D-10b	○	-	-	-	-	-	-	中生苔	*	後半	
19		G-8a	-	-	○	-	-	-	-	中生苔、木苔	後半	旱生地帶	
20		B-12b, c	○	○	-	-	-	-	-	野生土苔	旱生中葉	*	本山付近
21	野	B-12b, c	-	-	-	-	-	-	-	細苔類、灰苔類	*		
22			-	-	-	-	-	-	-	夜來苔、野生土苔	丘陵地帶		
23			-	-	-	-	-	-	-	土壤苔類・白蘚	*		
24			○	-	-	○	-	-	-	野生土苔、二岐苔	野生・古遺	*	4.0 (溝底)
25		馬鹿原(アサヒ)	○	○	-	-	○	○	○	王生苔、木苔	後半	*	
26			○	○	-	-	○	○	○	土壤苔類・白蘚	中生	*	5.3 (+)
27		黒川苔体	○	○	-	-	-	-	-	-	後半	4.5 (溝底)	条武力角ヒビク
28			○	-	○	-	-	-	-	野生土苔、木苔、苔類	丘陵地帶	10-11 (水田)	
29			○	-	○	○	○	○	○	土壤苔類、木苔	古遺	*	旱生地帶
30			○	-	-	○	○	○	-	青苔類、白蘚	中生	*	10.9 (水田)
31	中	對馬湖	○	○	-	○	○	-	-	泥炭苔、泥炭	荒原・玄安	丘陵地帶	
32			○	-	-	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭	中生 (3-14c)	*	
33			○	-	-	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭	近海	*	
34		篠	○	○	-	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭土苔、木苔	泥炭苔類	*	3.0 (林下地)
35			○	-	-	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭土苔	古遺	3.5 (水田)	塗状地帶
36		下山門	-	○	-	-	-	○	-	泥炭苔、木苔	6.0-7.0-平安	冲積地	南北方向に一帯
37		十日川	○	○	-	-	-	-	-	野生土苔、木苔	野生前帶	*	
38			-	-	○	-	-	-	-	紅毛苔、野生土苔、木苔	野生前帶	2.5-3.5 (溝底)	
39			○	○	○	○	○	-	-	野生土苔、木苔	*	2.1-2.3 (+)	
40		油六町ツイシ	○	○	○	○	○	-	-	*	後半	*	2.7 (+)
41			-	○	-	-	○	○	-	土苔類	古遺前帶	冲積地	3.1-3.2 (水田)
42	中	海明	○	○	-	-	-	-	-	青苔	中生	*	
43		牟多田	○	○	○	-	-	-	-	土苔類	古遺前帶	*	
44		御深町	○	○	○	-	-	-	-	土苔類	古遺前帶	冲積地	6.0-6.6 (溝底)
45			○	○	○	-	-	-	-	土苔類	*	4.2 (+)	旱生地帶
46		麻町	○	○	○	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭土苔、木苔	野生前帶	*	
47			○	○	○	-	-	-	-	泥炭苔、泥炭土苔、木苔	*	19.0 (林上端)	
48		北	○	○	○	-	-	-	-	野生土苔、木苔	野生前帶	*	
49		四箇J-10a-i	○	○	-	-	-	-	-	野生土苔、七脚苔、油麥苔	野生・古遺	*	20.3 (林上端)

立地の面では沖積地のうち下山門が砂丘後背地にもうけた杭列という点で類似する。Fig.35は今回調査地区内の土質柱状図である。砂やシルト混りの砂層が厚く堆積し-1.90mに湧水点がある。御笠川の左岸近くに位置しており、取水源に近接し、表層が砂に覆われているために長大な杭を多用することが要請されたのであろう。取水源に近いことが遺物が残存しにくい条件にあったことを示している。出土遺物は古墳時代の土師器と中世の土師器皿・青磁の2時期に分られるが、いずれも細片で堤防状造構の時期を決定するには資料不足である。古墳時代の護岸用杭列が横木を多用する構築例とは異なり、より簡潔な構築法によっていることを考慮すれば更に新しい時期とも考えられよう。

以上のように護岸用の杭列を連続して配置することにより堤防状造構を構築したと考えたが東側の杭列（B列）は四箇J-10a・f地点のように分水した水路としたものであろう。堤防状造構から20m西へ別の杭列が対応している。基礎工事のため一部しか確認していないが、この幅20mの間が主水路となっていたのであると思われる。

次に調査地点周辺部の旧地形についてふれておこう。

現在は市街地となっているため旧地形を復原するためには、明治33年陸地測量部の測量図（二万分の一）・昭和初期の

Fig. 21 土層柱状図

標 尺 M	地 質 柱 状 図					記 事
	深 度 M	層 N	図 表 名	地 質 名	色 調	
	M	M				
0.30	0.30		表 土			
0.80	0.50		砂質粘土	暗褐		±2.0~5.0%の 砂岩円礫を所々含む 粘土分は少ない 均質な砂。
-1.90						
2.40	1.60		中 砂	孔灰		
3						シルト、砂の互層 である。 高植物を混入する 含水位。 葉片多く混入 最下部粘土分多い
4						
5	3.20	2.80	シルト混り 中 砂	粘灰		疊層 ±2.0~3.0% 花崗岩起源の粗砂
6						
7						中位の疊り。
8	8.20	3.00	礁 混 砂	孔灰		
9						細粒砂岩の 風化した粘性土。 含水少ない。
10						粘土分多い。 疊層 ±2.0~5.0% の未風化部含む。
11	11.40	3.20	風化砂岩	黄褐		
12						棒状コアで採取 する。 硬質である。
13	12.90	1.50	礫 岩	青灰		頁岩の風化部であ る。 や、粘土化してい る。細片化する。
14	14.50	1.50	頁 岩	青灰褐		
15						コアは棒状に採 取。
16						所々泥質頁岩を若 干含む。一部泥質 砂岩を夹む。
17	17.00	2.50	砂質頁岩	鵝青灰		

地形図・終戦後の都市計画の際の現況図と遺跡の分布等を照合しながら検討するしかない。旧博多駅（明治42年建設）が現在の新博多駅に移転（昭和38年完成）するまでは、調査地点を含めた旧博多駅の南側一帯は条里制のなごりをとどめた田園風景が展開していた。この一帯の水路系統図を作り現況図に重ねたものが別図1である。

那珂台地の先端部（点線で図示した比恵遺跡群）から北西方向へ直線状へのびた水路は、現博多駅構内の北側付近から西側へ屈曲し旧博多駅南側の標高3.5~4.0mの等高線から北へのびることなく西へ流路をとり那珂川の支流博多川へ流入している。

現在の御笠川（石堂川）は旧比恵川とよばれ、那珂川へ流入していたとされている。これによれば、天正年間臼杵鑿発の開削により現在の流路をとることになったという。^{註①}
これは近世の地誌類に受けつがれ、近世の絵図には那珂川へ流入する旧比恵川を示している。

一方、地下鉄工事に伴う発掘調査により博多駅前約300m以南は河砂で覆れていることが確められ、その位置は「福岡市文化財地図」（中部・南部）に博多遺跡群の南限として図示している。^{註②} その地点は別図1のように旧博多駅南側の標高3.5~4.0mの地形変換点と一致する。これが旧比恵川の右岸に相当すれば、博多遺跡群とした中世の博多のまちは旧比恵川を南限として区画されていたことになる。

旧比恵川の河道は、直線状へ北西方向にのびた水路が西側へ屈曲する地形変換点と旧博多駅南側の標高3.5~4.0mの間に求めることができ、その間はほぼ2.5mの等高線内におさまる。このように流路が西へ屈曲した幅約40m、標高2.5m以内の範囲内に旧比恵川の流路を求めることができ、博多遺跡群がこれによって南を限られていることが認められる。別図1では御笠川（石堂川）と那珂川（博多川）の間を東から西へ流れていた旧比恵川の流路の想定範囲を網目で表現した。かって博多駅交通センターから出土した弥生終末期の上器はこの旧河道の想定範囲内におさまることになる。また、中山平次郎が矢倉門の付近から夥しく青磁が出土したと報告したのは、博多遺跡群内におさまるところから肯綮できる。また、旧比恵川の想定範囲とした南側の地形変換点が福岡平野における条里制施行の北限にあたることが理解できる。^{註③}

調査地点は、那珂台地先端部から北西方向へ樹枝状にのびた水路の一つに近接して位置わり護岸用杭列を配した堤防状遺構はその延長線上にある。そして、御笠川の取水口に近接しているため、流れが急で遺物が残存しうるような状況でなく、淀状を呈していたと推定しうる現博多駅付近とは景観を異にしていたと考えられることができる。

那珂台地の端部には船穂遺跡のように護岸用の杭列を構築した水路施設による水田稻作が弥生時代前期から展開されていることから、那珂台地先端部と旧比恵川想定範囲南側の間の沖積低湿地には弥生時代以降の水田稻作や条里制と関連する遺構が遺存していることが予想されるところから、今後の調査に期待したい。

注

- ①福岡市教育委員会『福岡市文化財地図』(中部・南部) 1981
- ②-(1)吉岡完祐編「櫛塚—福岡市比恵台遺跡」 日本住宅公團 1982
- 2)「比恵遺跡—第6次調査・遺構編」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集 1983
- ③蛇山塚「櫛溝住民小論〔一〕～〔四〕」史蹟57・68・74・78 九州大学 1956～1969
- ④注②-(1)前掲書
- ⑤中原忠外編『見捨てられた春日遺跡—绳文時代晚期終末へのアプローチ』 筑紫野古代史研究会叢書第2集 1977
- ⑥注②-(2)前掲書 ⑦注②-(2)前掲書
- ⑧-(1)「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書—1・櫛崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981
- 2)「博多」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集 1981
- ⑨「埋藏文化財遺跡地名考 総集編」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1971
- ⑩「青銅の武器—日本金属文化の黎明」 展団録 九州歴史資料館 1980
- ⑪「福岡地盤図」 福岡地盤図作成グループ(九州地質調査委員会) 1981
- ⑫「板付一市常住宅建設に伴う発掘調査報告書1971～1974」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976
- ⑬「板付周辺遺跡調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集 1976
- ⑭「板付周辺遺跡調査報告書(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集 1977
- ⑮-(1)「板付遺跡調査概報—1977～78年度」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 1979
- 2)「山崎純男「福岡市板付遺跡の成立と展開」歴史公論74 雄山閣 1981
- ⑯「板付周辺遺跡調査報告書(6)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 1980
- ⑰「板付一板付社会建設に伴う発掘調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集 1981
- ⑱「板付周辺遺跡調査報告書(8)」—1981年度調査概要」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集 1982
- ⑲「板付周辺遺跡調査報告書(9)」—1982年度調査概要」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983
- ⑳「那珂川休運動」 注⑩前掲書所収
- ㉑「学校建設地内遺跡調査報告書—三筑遺跡・次郎丸高石遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981
- ㉒「野多目前田遺跡調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第85集 1982
- ㉓注②-(1)前掲書。
- ㉔「下山門遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973
- ㉕吉岡完祐編「十郎川(一)(二)一福岡市早良平野石丸・古川遺跡」 住宅・都市整備公團 1982 早良
- ㉖「拾六町ツイジ遺跡—城原小学校建設地内遺跡調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983
- ㉗「福岡市西区大字拾六町所在の遺跡」 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」 第3章 福岡県教育委員会 1976
- ㉘「牟多田遺跡—福岡市西区大字野方字牟田壹岐中学校造成地区調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974
- ㉙「原深町遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 1981
- ㉚「鶴町遺跡」 (本文附・別冊) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976
- ㉛「山村遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982
- ㉜「四箇園周辺遺跡調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977
- ㉝藤原宏志「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査」 考古学ジャーナル227 1984
- ㉞「月刊文化財発掘出土情報」 84-2 ジャパン通信社 (1984) 所収
- ㉟「柴畠一佐賀県唐津市における初期稻作遺跡の調査」 唐津市文化財調査報告書第5集 1982
- ㉟注⑩前掲書所収
- ㉟雄山健一「北部九州の自然環境」 季刊考古学6 雄山閣 1984
- ㉟貝原薰信「筑前国経風土記」 各著出版 1974
- ㉟注④-(1)前掲書
- ㉟雄口達也「博多駅地下工事中出土の網目土器」「宮の前遺跡—福岡市松町宮の前D地点の調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 (1971) 所収
- ㉟中原平次郎「古代の博多(六)」 史考古学17-3 1927
- ㉟日野尚史「筑前国那珂・麻田・柏原・御立四郡における柔里について」 佐賀大学教育学部研究論集24-1 1976

Tab. 2 第1地点杭一覧表-1

(注)杭上端に打撃板を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地 点	No.	杭 型 式	法 長	幅	厚	深 度 (cm)	指 定	開	P.L.	電 力	考
B 列	1	○	1.8.6			5.0					
	2	○	1.7.7			4.5					
	3	○	1.8.0			5.0					
	4	○	1.9.8			5.0					
	5	○	1.8.7			5.5					
	6	○	1.6.4			5.5					
	7	○	1.8.6			5.0					
	8	○	1.9.0			4.0					
	9	○	1.8.7			5.0					
	10	○	1.9.5			5.0					
	11	○	1.9.0			5.0					
	12	○	1.9.3			4.0					
	13	○	2.0.5			7.0					
	14	○	1.9.7			6.5					
	15	○	1.7.0			5.0					
	16	○	1.7.7			4.0					
	17	○	1.9.6			4.0					
	18	○	1.6.7			4.5					
	19	○	2.0.1			4.0					
	20	○	2.1.2			9.0					
	21	○	1.6.5			6.0					
	22	○	1.7.4			5.0					
	23	○	1.7.6			7.0					
	24	○	1.6.7			6.0	右引				
	25	○	1.6.0			6.0					
	26	○	1.7.3			7.0					
	27	○	1.7.5			6.0					
	28	○	1.9.2			5.0	右引				
	29	○	1.7.6			6.0					
	30	○	1.8.9			4.0					
	31	○	2.8			3.5					
	32	○	1.5.7			6.0					
	33	○	1.6.8			6.0					
	34	○	1.2.2			3.0					
	35	○	1.8.0			5.0					
	36	○	1.2.5			7.0					
	37	○	1.1.3			6.0					
	38	○	1.1.5			6.0					
	39	○	1.1.7			7.0					
	40	○	1.5.5			9.0	右引				
	41	○	1.9.8			7.0	右引				
	42	○	1.4.8			5.0					
	43	○	1.0.0			8.0	右引				
	44	○	1.1.4			5.5	右引				
	45	○	1.8.3			7.0					
	46	○	1.5.2			7.0	右引				
	47	○	7.0			6.0	右引				
	48	○	1.6.5			7.0					
	49	○	1.3.6			6.0	右引				
	50	○	5.0			3.0	右引				
	51	○	1.4.1			3.0	右引				
	52	○	1.3.0			4.0	右引				
	53	○	1.0.2			4.0	右引				
	54	○	1.6.5			4.0	右引				
	55	○	1.3.2			3.0					
	56	○	1.0.4			4.0	右引				
	57	○	1.0.0			7.0					
	58	○	1.1.2			3.0	右引				
	59	○	9.6			3.0	右引				
	60	○	1.4.8			6.0					
	61	○	2.0.2			3.5					
	62	○	9.0			3.0					
	63	○	1.4.0			5.0					
	64	○	2.0.3			6.0	右引				
	65	○	1.6.6			7.0					
	66	○	1.4.8			4.0					
	67	○	1.2.9			6.0					
	68	○	1.2.7			5.0	右引				
	69	○	1.1.5			5.0	右引				
	70	○	1.5.6			6.0	右引				

杭上端の標高 3.7.5.9M

杭上端の標高 3.7.4.5M

杭上端の標高 3.7.1.2M

杭上端の標高 3.6.9.3M

杭上端の標高 3.7.1.6M

杭上端の標高 3.7.0.0M

杭上端の標高 3.5.8.9M

杭上端の標高 3.7.2.6M

杭上端の標高 3.2.6.5M

杭上端の標高 3.5.7.2.3M

杭上端の標高 3.5.8.3M

杭上端の標高 3.7.6.2.9M

杭上端の標高 3.7.7.6.2.9M

Tab. 3 第1地点杭一覧表-2

(注)杭上端に打撃桿を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地 点	番	地 球 の 標 高	標 高 [cm]		前後	左	右	前 者
			基	上				
B	2.1	○	159	4.5	右			
	2.2	○	162	6.0	右			
	2.3	○	172	7.0	右			
	2.4	○	177	5.0	右			
	2.5	○	138	5.0	右			
	2.6	○	165	6.0	右			
	2.7	○	50	5.0				
	2.8	○	154	6.5				
	2.9	○	151	5.5				
	3.0	○	165	6.0	右			
	3.1	○	137	4.0	右			
	3.2	○	162	4.0				
	3.3	○	164	5.0	右			
	3.4	○	145	6.0	右			
	3.5	○	166	5.0	右			
	3.6	○	58	6.0				
	3.7	○	146	3.0				
	3.8	○	72	3.0				
	3.9	○	58	4.0				
	3.0	○	161	6.0				
	3.1	○	160	4.0				
	3.2	○	206	5.0				
	3.3	○	231	5.0				
	3.4	○	145	4.0				
	3.5	○	56	5.5				
	3.6	○	146	4.0				
	3.7	○	141	4.0				
	3.8	○	188	4.0	右			
	3.9	○	86	4.0				
	3.0	○	199	5.0				
	3.1	○	175	5.0				
	3.2	○	153	2.0				
	3.3	○	224	5.0				
	3.4	○	140	4.0				
	3.5	○	196	5.0	右			
	3.6	○	230	5.0				
	3.7	○	62	4.0	右			
	3.8	○	187	4.0	右			
	3.9	○	163	6.0				
	3.0	○	116	3.0				
	3.1	○	30	3.0				
	3.2	○	77	6.0				
	3.3	○	135	1.0	右			
	3.4	○	93	4.0	右			
	3.5	○	126	1.5	右			
	3.6	○	157	5.0	右			
	3.7	○	183	4.0	右			
	3.8	○	312	5.0				
	3.9	○	326	6.0				
	3.0	○	170	4.0				
	3.1	○	190	6.0				
	3.2	○	175	6.0	右			
	3.3	○	145	7.0	右			
	3.4	○	167	4.0	右			
	3.5	○	152	6.0				
	3.6	○	126	5.0				
	3.7	○	93	3.0				
	3.8	○	134	2.5				
	3.9	○	116	4.0				
	3.0	○	85	3.0				
	3.1	○	20	4.0				
	3.2	○	132	4.0	右			
	3.3	○	166	1.0	右			
	3.4	○	119	5.0				
	3.5	○	111	4.0				
	3.6	○	76	5.5				
	3.7	○	131	4.5				
	3.8	○	113	7.0	右	Fig. 16	17	杭上端の標高 3.5 5.5 M
	3.9	○	166	5.0		Fig. 11	15	杭上端の標高 3.4 5.6 M
	3.0	○	134	5.0	右			

Tab. 4 第1地点杭一覧表-3

(注)杭上端に打撃錐を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地 点	No.	続 形 の 状 態	法 長			法 面	厚	法 深	幅 度	固	P.L.	備 考
			長	幅	厚							
B 列	141	○	1.33					4.5				
	142	○	1.12					4.0	有り			
	143	○	1.63					7.0				
	144	○	1.28					7.0	有り	Fig. 14	1.6	
	145	○	2.3					6.0				極本
	146	○	1.50					4.0	有り			
	147	○	8.2					5.5				
	148	○	1.20					4.0				
	149	○	1.26					3.0				
	150	○	7.3					5.0	有り			
	151	○	1.07					5.0				
	152	○	6.0					4.0	有り			
	153	○	7.3					3.0	有り			
	154	○	1.04					3.5	有り			
	155	○	1.08					7.0				
	156	○	1.06					5.0	有り			
	157	○	9.2					6.0	有り			
	158	○	1.26					5.5	有り			
	159	○	1.67					4.5				杭上端の標高 3.377.8M
	160	○	1.34					5.5				
	161	○	9.2					6.0	有り	Fig. 14	1.6	
	162	○	4.0					4.5				
	163	○	1.34					4.5	有り			
	164	○	1.26					5.0		Fig. 14	1.6	杭上端の標高 3.382.8M
	165	○	0.5					4.0				
	166	○	1.28					4.0				
	167	○	1.26					5.0		Fig. 12	1.5	
	168	○	1.46					5.0	有り			杭上端の標高 3.14 M
	169	○	7.6					3.0				
	170	○	1.40					4.0				
	171	○	1.98					4.0				
	172	○	1.24					4.0				
	173	○	1.26					4.0				杭上端の標高 3.293.8M
	174	○	1.99					4.0	有り			
	175	○	1.12					3.0	有り			
	176	○	5.3					3.0				
	177	○	1.35					3.0				
	178	○	1.29					5.0	有り			
	179	○	1.28					4.0				杭上端の標高 3.36.8M
	180	○	1.16					4.0		Fig. 16	1.7	
	181	○	1.21					5.0				
	182	○	1.12					4.0		Fig. 12	1.5	
	183	○	1.48					4.5	有り	Fig. 12	1.5	
	184	○	1.18					6.0		Fig. 6	1.7	
	185	○	9.7					5.0		Fig. 14	1.6	
	186	○	1.01					5.0				
	187	○	1.22					4.0		Fig. 14	1.6	
	188	○	1.80					5.0		Fig. 16	1.7	
	189	○	1.35					6.2		Fig. 12	1.5	
	190	○	1.59					6.0		Fig. 16	1.6	杭上端の標高 2.282.34M
	191	○	1.72					3.0		Fig. 17	1.5	
	192	○	1.16					3.0	有り	Fig. 14	1.6	
	193	○	1.15					4.0		Fig. 16	1.7	
	194	○	1.37					5.0		Fig. 9	1.5	
	195	○	1.63					5.0		Fig. 12	1.5	
	196	○	1.03					5.0		Fig. 16	1.7	
	197	○	6.6					3.0		Fig. 16	1.7	
	198	○	1.24					5.0	有り	Fig. 22	1.5	
	199	○	1.21					5.0		Fig. 16	1.7	
	200	○	1.14					4.0		Fig. 13	1.6	
	201	○	1.43					5.0				
	202	○	1.28					4.0	有り	Fig. 15	1.6	杭上端の標高 3.35.5M
	203	○	1.43					6.0		Fig. 14	1.6	
	204	○	1.04					3.0		Fig. 16	1.7	
	205	○	1.93					4.0		Fig. 16	1.7	
	206	○	1.27					5.0		Fig. 15	1.5	杭上端の標高 3.61.8M
	207	○	1.59					5.0		Fig. 12	1.5	
	208	○	1.10					3.0		Fig. 16	1.7	
	209	○	4.7					3.0				
	210	○	1.32					4.0		Fig. 13	1.5	

Tab. 5 第1地点杭一覧表-4

(注)杭上端に打撃痕を有するものを実形とし上端の標高を記入した

地 点	No.	杭 の 状 态	地 面	深 度 (m)	断面	回	P.L.	南 北 東 西
B 列	211	○	13.0	-	3.5		Fig. 1.5	1.5
	212	○	16.5	-	3.6		Fig. 1.5	1.5
	213	○	11.3	-	5.0			
	214	○	15.6	-	4.7		Fig. 1.1	1.5
	215	○	12.9	-	5.5	有り	Fig. 1.5	1.5
	216	○	15.6	-	5.0		Fig. 1.3	1.5
	217	○	12.6	-	5.2	有り	Fig. 1.1	1.5
	218	○	12.7	-	4.0		Fig. 1.4	1.6
	219	○	15.9	-	5.0			
	220	○	14.5	-	5.0		Fig. 1.2	1.5
	221	○	14.0	-	5.3	有り	Fig. 1.3	1.6
	222	○	15.0	-	5.4		Fig. 1.5	1.6
	223	○	13.1	-	5.4	有り	Fig. 1.5	1.6
	224	○	8.1	-	5.5	有り	Fig. 1.6	1.7
	225	○	11.0	-	4.5			
	226	○	14.5	-	4.2		Fig. 1.3	1.5
	227	○	16.6	-	4.0		Fig. 1.4	1.6
	228	○	17.5	-	3.0	有り	Fig. 1.3	1.6
	229	○	21.5	-	5.0	有り	Fig. 1.1	1.5
	230	○	15.0	-	5.5		Fig. 1.1	1.5
	231	○	19.1	-	3.0			
	232	○	14.5	-	4.0	有り		
	233	○	14.3	-	5.0	有り	Fig. 1.3	1.6
	234	○	14.1	-	5.5	有り		
	235	○	15.6	-	8.0	有り	Fig. 1.5	1.6
	236	○	17.3	-	7.0	有り		
	237	○	12.5	-	4.0	有り		
	238	○	8.7	-	6.0	有り		
	239	○	5.6	-	5.0			
	240	○	15.6	-	4.0	有り		
	241	○	15.6	-	4.5			
	242	○	16.0	-	5.0	有り		
	243	○	18.1	-	5.0			
	244	○	15.7	-	4.0	有り		
	245	○	16.2	-	5.5	有り		
	246	○	12.8	-	5.0	有り		
	247	○	12.1	-	2.0	有り		
	248	○	18.6	-	5.5	有り		
	249	○	19.3	-	6.0			
	250	○	20.5	-	2.0			
	251	○	14.7	-	8.0			
	252	○	15.7	-	4.0	有り	Fig. 1.2	1.5
	253	○	13.3	-	4.0			
	254	○	14.3	-	8.0			
	255	○	17.1	-	5.0	有り		
	256	○	15.4	-	5.5			
	257	○	15.6	-	4.5	有り		
	258	○	14.6	-	4.0			
	259	○	14.6	-	6.0	有り	Fig. 1.3	1.5
	260	○	15.2	-	5.5	有り	Fig. 1.1	1.5
	261	○	16.6	-	4.0	有り		
	262	○	18.9	-	4.0	有り		
	263	○	21.5	-	5.0			
	264	○	17.8	-	5.0			
	265	○	8.6	-	2.0			
	266	○	5.6	-	7.0	有り		
	267	○	6.8	-	7.0	有り		
	268	○	11.2	-	4.5			
	269	○	16.6	-	3.5			
	270	○	17.5	-	3.5			
	271	○	17.6	-	6.0	有り		
	272	○	15.5	-	8.0	有り		
	273	○	12.3	-	4.0			
	274	○	12.2	-	2.0			
	275	○	13.9	-	6.0	有り		
	276	○	14.4	-	4.0	有り		
	277	○	13.3	-	3.0	有り		
	278	○	12.6	-	4.0	有り		
	279	○	13.6	-	8.5	有り		
	280	○	14.6	-	5.0			

Tab. 6 第1地点杭一覧表-5

(注)杭上端に打撃桿を有するものを完形 し上端の標高を記入した

地 点	No.	杭 形(次)	規 格			規 格	断面	回	PL	施 工
			長	幅	厚					
B 例	2.8.1	○	2.6.8			2.5				
	2.8.5	○	1.8.0			2.0				
	2.8.5	○	2.7.4			5.0				
	2.8.6	○	1.7.6			5.0	右引			
	2.8.9	○	8.3			5.0	右引			
	2.8.6	○	1.6.6			4.0	右引			
	2.8.7	○	1.6.6			4.0	右引			
	2.8.8	○	1.6.6			4.0	右引			
	2.8.9	○	1.9.7			4.0	右引			
	2.9.0	○	1.8.2			4.0				
	2.9.1	○	6.5			5.5	右引			
	2.9.7	○	1.6.4			4.0	右引			
	2.9.3	○	5.7			3.0	右引			
	2.9.4	○	1.6.0.5			5.0	右引			
	2.9.5	○	7.0			5.0	右引			
	2.9.6	○	8.0			5.0	右引			
	2.9.7	○	8.7			5.0	右引			
	2.9.8	○	1.1.6			5.0	右引			
	2.9.9	○	5.1			5.0	右引			
	3.0.0	○	1.5.8			4.0	右引			
	3.0.1	○	1.6.0.3			5.0	右引			
	3.0.2	○	3.5			3.0	右引			
	3.0.3	○	1.7.0			6.0	右引			
	3.0.4	○	6.9			4.0				
	3.0.5	○	1.6.1			5.0				
	3.0.6	○	1.6.3			5.0				
	3.0.7	○	1.6.5			5.0				
	3.0.8	○	5.3			4.0				
	3.0.9	○	1.1.3			4.0				
	3.1.0	○	2.7			5.5				
C 例	3.1.1	○	1.1.6			6.0	右引			
	3.1.2	○	2.9			6.0	右引			
	3.1.3	○	2.7			5.0	右引			
	3.1.4	○	1.2.3			5.0	右引			
	3.1.5	○	1.6.8			6.0	右引			
	3.1.6	○	1.2.3			4.0	右引			
	3.1.7	○	1.2.2			4.0	右引			
	3.1.8	○	1.4.8			5.5				
	3.1.9	○	3.3			4.0				
	3.1.10	○	1.8			3.0				
	3.1.11	○	3.2			3.0				
	3.1.12	○	3.2			3.0				
	3.1.13	○	8.8			4.0				
	3.1.14	○	9.8			4.0				
	3.1.15	○	4.1			3.0	右引			
	3.1.16	○	3.6			3.0				
	3.1.17	○	4.7			3.0				
	3.1.18	○	5.2			3.0	右引			
	3.1.19	○	4.1			2.0				
	3.1.20	○	3.2			3.0				
	3.1.21	○	4.6			3.0				
	3.1.22	○	3.5			3.0				
	3.1.23	○	8.6			4.0				
	3.1.24	○	4.4			3.0				
	3.1.25	○	9			3.0				
	3.1.26	○	1.2			1.5				
	3.1.27	○	1.2			1.5				
	3.1.28	○	1.5.8			2.0				
	3.1.29	○	3.1			2.5				
	3.1.30	○	3.7			2.0				
	3.1.31	○	2.2			3.0	右引			
	3.1.32	○	3.5			3.0				
	3.1.33	○	1.5			2.0				
	3.1.34	○	1.7			2.5				
	3.1.35	○	6			1.5				
	3.1.36	○	1.2			1.5				
	3.1.37	○	2.6			2.5				
	3.1.38	○	2.6			2.5				
	3.1.39	○	1.8			2.0				
	3.1.40	○	9			2.0				
	3.1.41	○	1.6			2.0				
	3.1.42	○	3.0							
	3.1.43	○	3.0							
	3.1.44	○	3.0							
	3.1.45	○	3.0							
	3.1.46	○	3.0							
	3.1.47	○	3.0							
	3.1.48	○	3.0							
	3.1.49	○	3.0							
	3.1.50	○	3.0							
	3.1.51	○	3.0							
	3.1.52	○	3.0							
	3.1.53	○	3.0							
	3.1.54	○	3.0							
	3.1.55	○	3.0							
	3.1.56	○	3.0							
	3.1.57	○	3.0							
	3.1.58	○	3.0							
	3.1.59	○	3.0							
	3.1.60	○	3.0							
	3.1.61	○	3.0							
	3.1.62	○	3.0							
	3.1.63	○	3.0							
	3.1.64	○	3.0							
	3.1.65	○	3.0							
	3.1.66	○	3.0							
	3.1.67	○	3.0							
	3.1.68	○	3.0							
	3.1.69	○	3.0							
	3.1.70	○	3.0							
	3.1.71	○	3.0							
	3.1.72	○	3.0							
	3.1.73	○	3.0							
	3.1.74	○	3.0							
	3.1.75	○	3.0							
	3.1.76	○	3.0							
	3.1.77	○	3.0							
	3.1.78	○	3.0							
	3.1.79	○	3.0							
	3.1.80	○	3.0							
	3.1.81	○	3.0							
	3.1.82	○	3.0							
	3.1.83	○	3.0							
	3.1.84	○	3.0							
	3.1.85	○	3.0							
	3.1.86	○	3.0							
	3.1.87	○	3.0							
	3.1.88	○	3.0							
	3.1.89	○	3.0							
	3.1.90	○	3.0							
	3.1.91	○	3.0							
	3.1.92	○	3.0							
	3.1.93	○	3.0							
	3.1.94	○	3.0							
	3.1.95	○	3.0							
	3.1.96	○	3.0							
	3.1.97	○	3.0							
	3.1.98	○	3.0							
	3.1.99	○	3.0							
	3.1.100	○	3.0							
	3.1.101	○	3.0							
	3.1.102	○	3.0							
	3.1.103	○	3.0							
	3.1.104	○	3.0							
	3.1.105	○	3.0							
	3.1.106	○	3.0							
	3.1.107	○	3.0							
	3.1.108	○	3.0							
	3.1.109	○	3.0							
	3.1.110	○	3.0							
	3.1.111	○	3.0							
	3.1.112	○	3.0							
	3.1.113	○	3.0							
	3.1.114	○	3.0							
	3.1.115	○	3.0							
	3.1.116	○	3.0							
	3.1.117	○	3.0							
	3.1.118	○	3.0							
	3.1.119	○	3.0							
	3.1.120	○	3.0							
	3.1.121	○	3.0							
	3.1.122	○	3.0							
	3.1.123	○	3.0							
	3.1.124	○	3.0							
	3.1.125	○	3.0							
	3.1.126	○	3.0							
	3.1.127	○	3.0							
	3.1.128	○	3.0							
	3.1.129	○	3.0							
	3.1.130	○	3.0							
	3.1.131	○	3.0							
	3.1.132	○	3.0							
	3.1.133	○	3.0							
	3.1.134	○	3.0							
	3.1.135	○	3.0							
	3.1.136	○	3.0							
	3.1.137	○	3.0							
	3.1.138	○	3.0							
	3.1.139	○	3.0							
	3.1.140	○	3.0							
	3.1.141	○	3.0							
	3.1.142	○	3.0							
	3.1.143	○	3.0							
	3.1.144	○	3.0							
	3.1.145	○	3.0							
	3.1.146	○	3.0							
	3.1.147	○	3.0							
	3.1.148	○	3.0							
	3.1.149	○	3.0							
	3.1.150	○	3.0							
	3.1.151	○	3.0							
	3.1.152	○	3.0							
	3.1.153	○	3.0							
	3.1.154	○	3.0							

Tab. 7 第1地点杭一覽表-6

(注)杭上端に打撃振を有するものを定形とし上端の標高を記入した

Tab. 8 第2地点杭一覧表-1

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地 点	No.	杭 の 形 式	法				幅 (m)	幅	P.L.	備 考
			東	西	北	南				
1	1	L	4.2	1.5	5.5		4.0		Fig. 2.0	1.7
2	2	○	6.0				3.0			
3	3	○	1.3							
4	4	△	3.7.5	3.0	3.0					
5	5	○	1.5	1.0			3.5			
6	6	○	5.4				4.0	右引		
7	7	○	1.7				2.0			
8	8	○	8.0				4.5			
9	9	○	8.4				5.0	右引		
10	10	○	4.6				4.5			
11	11	○	8.1				3.5		Fig. 2.0	1.7
12	12	○	2.7.5				4.0			
13	13	○	9.0				5.0	右引	Fig. 2.0	1.7
14	14	○	3.5				4.0			
15	15	○	8.9				4.0			
16	16	○	1.4				1.5			
17	17	○	3.2				4.0			
18	18	○	1.6				5.0			
19	19	○	1.2.0				5.5			
20	20	○	1.5.5				5.0			
21	21	○	1.4.0				5.0			
22	22	○	1.4.0				5.0			
23	23	○	1.2.0				5.0			
24	24	○	1.4.6				5.5			
25	25	○	1.2.2				6.0			
26	26	○	1.5.2				6.5			
27	27	○	1.5.2				5.0			
28	28	○	1.8.6				5.5			
29	29	○	1.4.5				5.0			
30	30	○	1.1.0				7.0			
31										欠
32										欠
33	33	○	1.1.4				5.0			
34	34	○	9.2				6.5	右引		
35	35	○	7.0				6.0			
36	36	○	9.4				6.5			
37	37	○	9.0				6.0			
38	38	○	1.0.3				5.5			
39	39	○	5.8				4.5		Fig. 2.0	
40	40	○	3.2.2				4.5			
41	41	○	4.9				4.5		Fig. 2.0	
42	42	○	7.0				4.0			
43	43	○	6.0				4.5			
44	44	○	8.1				3.0			
45	45	○	1.0.2				5.0	右引		
46	46	○	1.2.8				5.0			
47	47	○	1.1.2				5.0		Fig. 2.0	1.2
48	48	○	5.8				3.0			
49	49	○	1.6				3.0			
50	50	○	1.4				2.5			
51	51	○	3.4.4				4.0			
52	52	○	2.1				3.5			
53	53	○	2.5				3.5			
54	54	○	9.0				5.0		Fig. 1.9	1.7
55	55	○	1.3.2				4.5			
56	56	○	7.0				4.0			
57	57	○	1.5.5				7.5	右引		
58	58	○	1.8.6				5.0			
59	59	○	1.2.0				4.0		Fig. 1.9	1.7
60	60	○	1.8.0				5.0	右引		
61	61	○	8.5				6.0			
62	62	○	1.1.6				5.0			
63	63	○	4.1				3.0			
64	64	○	3.0				4.5			
65	65	○	4.4				4.0			
66	66	○	2.0				3.0			
67	67	○	1.1.3				5.0	右引		
68	68	○	1.5.2				6.0			
69	69	○	1.5.8				4.5			
70	70	○	1.4.3				5			

Tab. 9 第2地点杭一覽表-2

(注)杭上端に打撃痕を有するものを実測とし上端の標高を記入した。

図 版



杭列全景

(西から)



B列杭抜き状態

(南から)



西側全景

(南から)



西側全景

(南から)



杭B列とC列全景

(南より)



B列全景

(北西より)



杭・B列全景

(北東より)

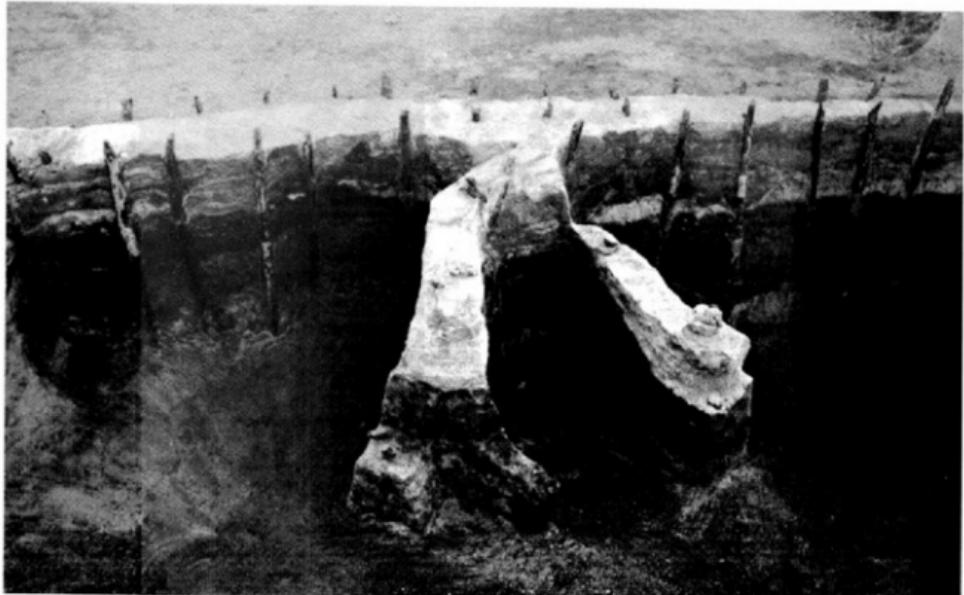


杭・B列全景

(北西より)



張出し造構検出状態



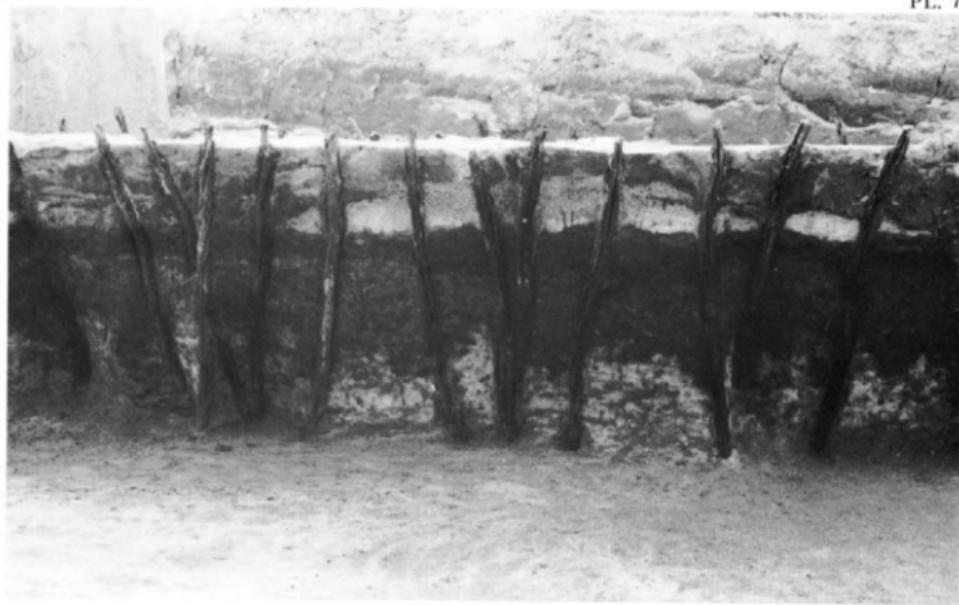
B列張出し部分検出状態



B列杭の張出し部分



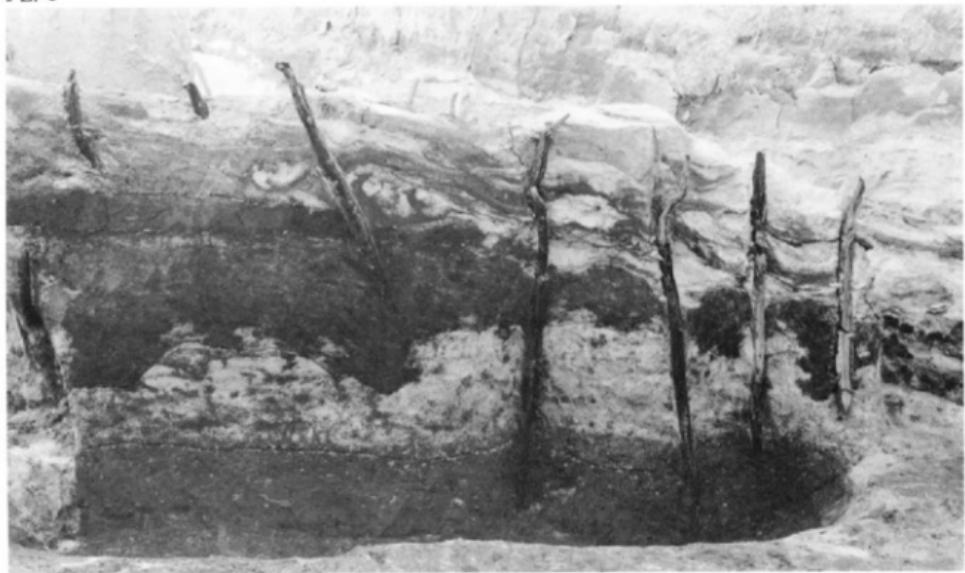
B列杭検出状態と土層



杭列全景



杭列とシガラミ検出状態



杭列全景



杭列全景とシガラミ検出状態



杭とシガラミ検出状態



青磁出土状態



土層状態

(北から)



土層近景



第2地点遠景

(北から)



第2地点全景

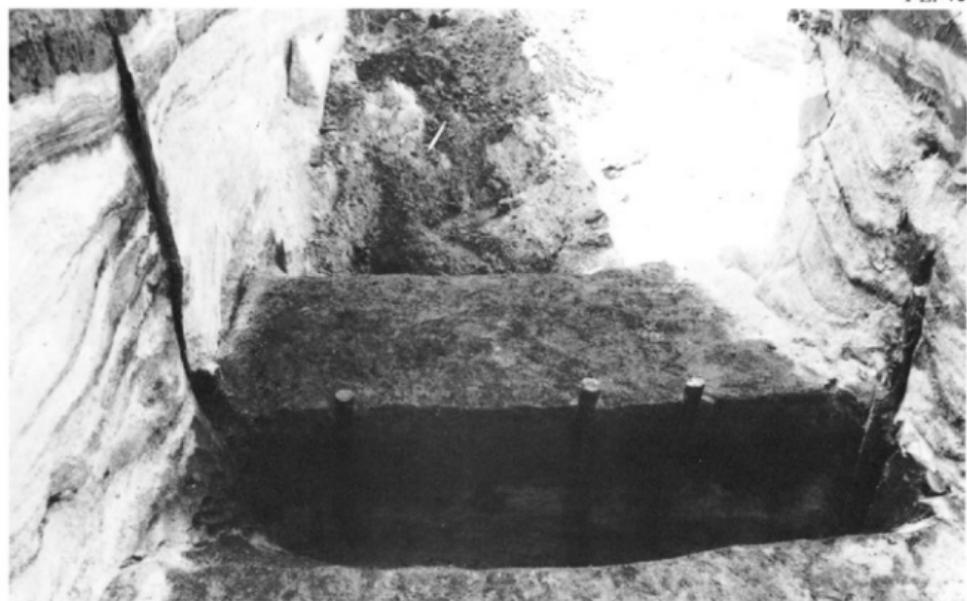
(東から)



第2地点近景



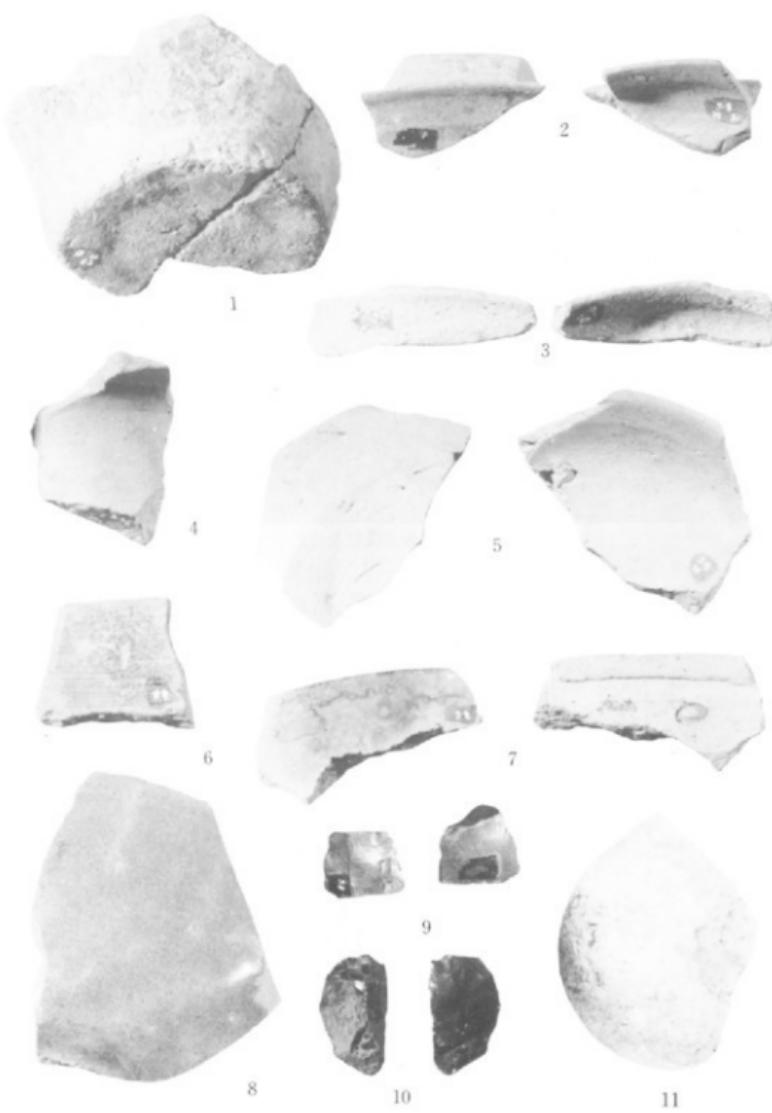
第2地点杭列出土状态



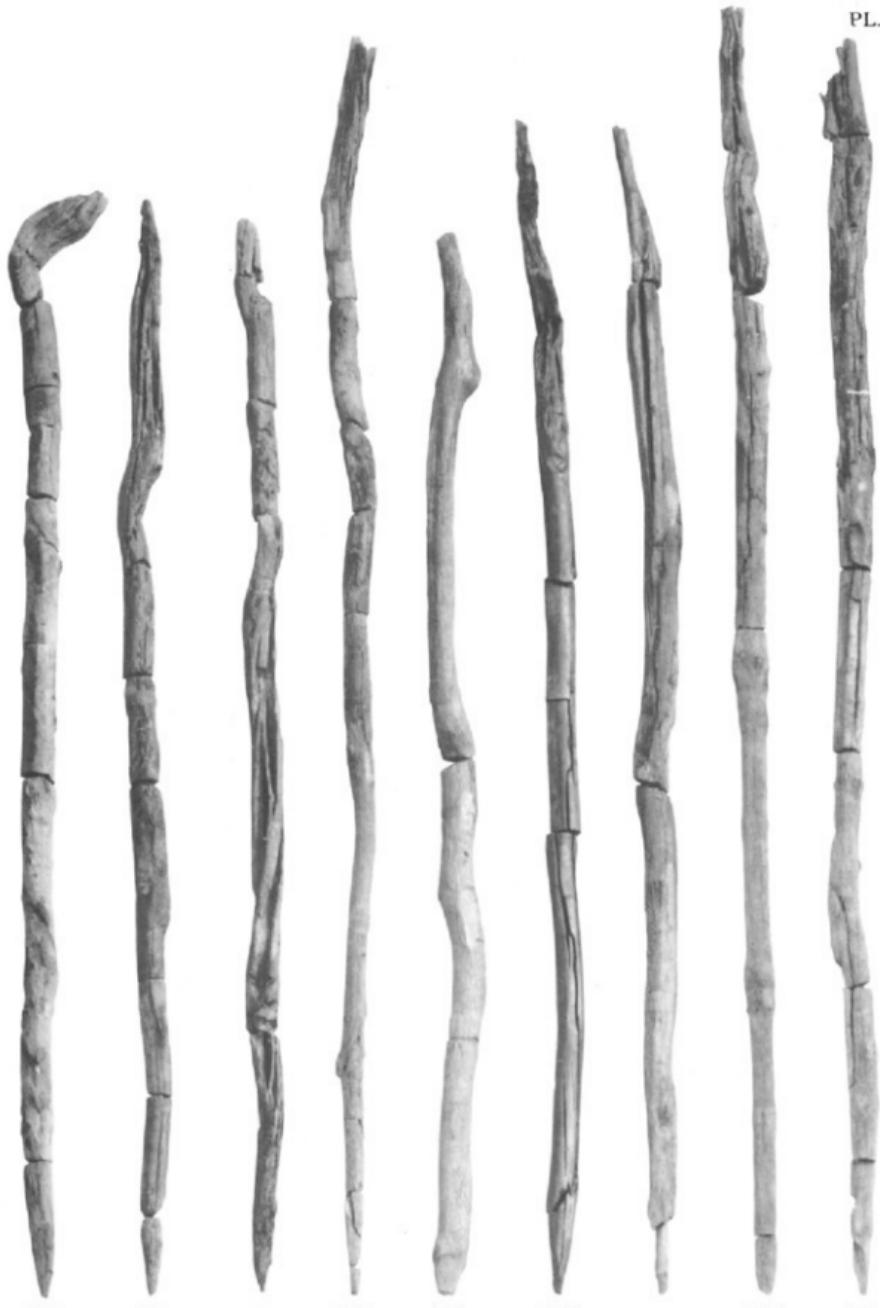
第2地点杭列の全景



第2地点杭列出土状態



出土遺物・土器・石器



195

216

228

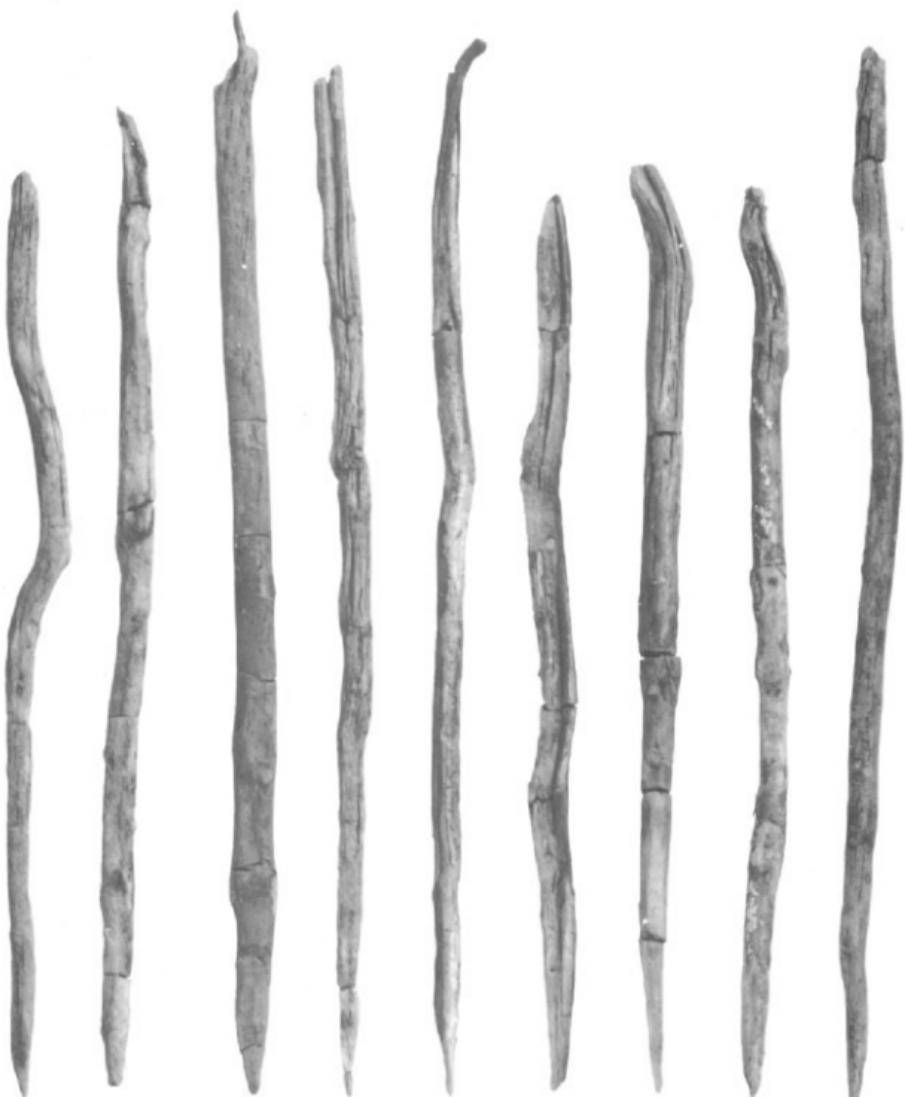
229

214

226

212

217



194 207 230 139 190 210 259 221 233



出土遗物·杭

福岡市博多区
駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集

1984年（昭和59年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 球玉川印刷所

1

L

2

J

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書一〇二集

福岡市教育委員会